といつたが、成程、違ひはない。孔子が、「好んで小慧を行ふ。」といつてゐるのは、やはり、この種の小才子の事である。

これに對して、大人、君子には、小才がない、世上の俗事、小問題に就いては、とんと、役に立たない。甚はだ、薄ぼんやりとしてゐる。

君子は、盛德ありて、容貌、愚なるが如し。「老子」

とは、こゝの事である。世情に疎く、世事に迂濁である。馬鹿正直である。

乃で、小才の利く小人は、大人を輕侮して、動もすると、鼻先であしらひにかゝる。

學者、世事に疎し。「日本俚諺」

と冷笑する。

が、小人は、小人である。大人は、大人である。小才子は、小才子である。君子は、君子である。古歌に、

深山木の、その梢とも、わかざりし、櫻は花に、顯はれにけり。

とある通り、何かの機會に、それぞれ、その特色を見はさずにゐない。

殊に、大事に臨んで、騷がず、驚かず、身を以て、局に當り。臆せず、怯まず死を以て、義を能くするのは、平素無事の際、ぼんやり乎としてゐる大人、君子の事で、小人、小才子は、逸足出して、逃げてしまふ。孔子の語に、

君子は、小知すべからずして、大受すべし。小人は、大受すべからずして、小知すべし。

とは、こゝの事である。赤穗の難に、國を脊負つて立つたのは、小才子の大野九郎兵衛ではなくて、畫行燈の綽名のあつた大石内藏助であつた。

七の二三　人の皮を苅る

◇濡れぬ先こそ、露をも厭へ。「日本俚諺」。

人の田を、論ずる者、訴訟に負けて、妬さに、その田を苅りて、取れとて、人を遣はしけるに、先づ、道すがらの田をさへ苅りもてゆくを、これは、論じ給

ふ所にあらず。如何にがくは、と言ひければ、苅る者ども、その所とても、苅るべき理なけれども、僻事せんとて、まかる者なれば、何處をか苅らざらむ、とぞいひける。理、いとをかしかりけり。」(徒然草)

× × ×

「濡れぬ先こそ、露をも厭へ。」濡れてしまへば、暴風雨も何かはの、自暴自棄的の考へである。

小人は、萬事にこれである。斯くて、君子の上達するに反して、小人は下達し年を老るに從つて、次弟に惡くなつて行く。憐れむべきである。

七の二四・野坡盗人と語る

◇四海の内、皆、兄弟なり。「論語」

俳人野坡は、越前の國前洲の人である。初め、江戸に遊び、後ち、大阪に住んで、樗木社と號した。その句に、

ほとゝぎす、顔の出られぬ、格子がな。

長松が、親の名で來る、御慶かな。

はき掃除、してから椿、散りにけり。

この頃の。垣のゆひ目や、初時雨。

爲人、恬淡無欲、家は、極めて貧乏ながら、一向、氣にもしなかつた。或る夜盗人が入ると、

「俺には、何一つ、貯へがない。たゞ、茶を一斤買つて置いた。今夜は、寒いから、柴を焚いて、ゆつくり話さう。」と、澄したもの。盗人は、商賣柄、こゝ彼處眺め廻し、机の上に、

わが庵の、櫻もさびし、煙先。

とあるのを見て、

「何の火事だ?」と尋ね、野坡が、仔細を語ると、

「ぢや、この場の事も、句になるか。」といふ。野坡は、取り敢へず。

垣くゞる雀ならなく、雪のあと。

と書いて見せた。盜人は、感心して立ち去つた。

× × ×

昔は、萬乘の尊を以てして、

『一床の外、皆他人！　夜も、安心して眠られぬ。』と嘆じた、唐の太宗もあるが心の持ち方一つで、我々四夫も、尙ほ、能く、全世界を一家とし、全人類を兄弟として、仲好く、心持ちよく、愉快に交際して行くことが出來る。

「我々には「我れ」がある。我れがあるから、彼れがあり、他人があり、敵があつて、その敵と衝突し、互びに、怪我をするやうな、大事件も出來する。

眞實、我々は、よく、人と衝突する。我れといふ應へがあるから、衝突するのである。電車は、電信柱と衝突する。自働車は、汽車と衝突する。けれど、空氣や煙は、何ものとも衝突しない。電信柱と衝突して、交番を煩はした空氣もなければ、汽車と衝突して、溝へ跳ね飛された煙もない。煙や空氣には、應へがない應へがないから、衝突もない。衝突は、應へがあるから起る。我れといふ、頑固

な應へがあるから、時々、人と衝突して、目から火を出し、口から泡を出し、鼻から血を出す。「一床の外、皆他人！」——他人どころか、皆敵で、彼方でもこつり、此方でもこつり、頭を打つけてばかりゐる、その因は、我れに在る、我れといふ應へに在る。

此方に我れがあるから、先方にも、我れがある。此方に應へがあるから、先方にも、應へがある。水上では、間々、船と船とが衝突して、船頭と船頭とが衝突する。けれど、主のない捨小船と衝突して、眞つ赤になる船頭のないのは、何故か。出し抜けに、ぽかりとやられゝば、誰れでも、

『何しやがる？』と立腹する。けれど、三つ、四つの子供に打たれて、むきになる馬鹿者のないのは、何故か。彼れにも、此れにも、我れといふ應へがないからである。先方の我れは、此方の我れか、これを造る。先方の應へは、此方の應へが、これを造る。

であるから、我れといふ應へを取り捨てゝ、所謂る、無我になつてしまふ。すれば、彼れもなくなり、他人もなくなり、敵もなくなる。此方が、人を敵としな

いは勿論、人も、此方を敵としない。話の俳人野坡のやうに、「雀ならなく」、「垣くゝる」盗人をさへ、我が友として、雪の一夜を、樂しく、茶話に明すことも出來る。

畢竟、此方の心持ち一つに在る。古人の歌に、

江に寫る、かけ愛するも、憎むのも、もとは立ち寄る、この身にぞ在る。

とある通り、此方が、無我になり、我れといふ應へを去つてしまへば、世界に他人といふのはない。況して、敵などのあるわけはない。「四海の内、皆、兄弟なり。」で、全世界を一家とし、全人類を兄弟として、何人とも、愉快に相交はることが出來る。無我なるかな！　無我なるかな！　大人、須らく、大度量あるべきであるか、無我は、大度量の骨頂である。

□我れといふ小さきとけがある故に
物にかゝりて動かれもせず

七の二五　福島正則の諦めぶり

◇かゝる時、常の心の、動がぬを、終り亂れぬためしにはせよ。「僧涌蓮」

福島左衛門大夫正則は、關ケ原の軍功によつて、安藝、備後の二個國を授けられ、尾張の清洲から、安藝の廣島へ移つたが、元和五年六月、國除せられ、信州川中島の謫地に、落莫たる晩年を送つた。

事の次第は、元和三年、廣島に洪水があつて、城の三の丸迄浸水した。折柄、參勤として江戸に在つた正則は、翌年、歸國に臨み、本多上野守に迄、『城普請が致したい。然るべく、お取り計ひ下されよ。』と頼み入れた。下野守は、

『機を見て、お上へ申し上げやう。』と答へた。正則は、その儘、歸國した。

所が、待つことこれを久しうして、何の沙汰もない、飛脚を以て、再び、屆け

出た。上野守の返辭は、やはり、

『機を見て、お上へ申し上げやう。』といふのであつた。

然るに、正則は、待ち倦んだが、他に餘儀ない事情があつたか、五年の正月から、無斷で、普請に取りかゝつた。

所が、武家法度の中に、

諸國居城、修補たりと雖も、必らず、言上すべく、況んや、新儀の構營、堅く、停止せしむる事。

といふ個條がある。正則の所爲は、正しく、この個條に觸れる。その上、性質が荒くて、數多、罪のない者を殺し、政治の仕方が惡いとのことで、二代將軍秀忠上洛の際、然うした嚴命が發せられたのである。

時に、正則は、江戸參勤中であつた。家來の者は、幕府の處置を不當として、非常に憤慨し、一戰にも及びかねまじき、氣勢を見せたが、正則は、極力それを制して、

『東照宮が、世に在られるなら、自分にも、言分はある。けれど、今將軍に對し

ては、何も、申し上げまい。といつて、話頭一轉、

『彼の弓を見よ。戰亂の日には、大切な武具として、珍重がられるが、天下が、泰平になると、最早、無用の長物で、袋に入れられ、倉の片隅へしまはれる。自分の事が、正しく、それぢや。泰平の今日、用のない弓として、川中島の倉の中へしまはれるのぢや。別に、不思議とするには足らない。』とばかり、諦め切つて彼の配所へ趣むいた。

× × ×

古人にも、

狡兎、死して、良狗、煮らる。

の嘆があつた。福島正則の運命も、亦た、悲しからずや、である。

が、それは、免るべからざる運命であつた。專制君主の威は、虎よりも猛しい愛すれば、寵があり、憎めば、死がある。多年、その忌憚を受けて來た身の、一朝、諸侯を失脚して、配所の月を見るべくなつたこと、まことに、免るべからざる運命であつた。

已に、免るべからざる運命とある以上、泣いても、笑つても、仕方はない。藻搔き、苦しんで見た所で、詮はない。詮なしと知つて、尙ほ且つ、藻搔き、苦しむのは、愚である。寧ろ、執着の爲である。さつぱりと、諦めて已むに如かぬ。

諦めば、心の養生。「日本俚諺」

とさへいふ。

人は、左右、諦めが大切である。而も、事に臨んで、俄かに諦めるのは、既に遲い。俄かに諦めやうとしても、諦められるものではない。常に諦めてゐる——これでなければならぬ。

この世は、無常の世である。何一つ、確かとすべきものはない。何一つ、あてになるものはない。天氣豫報のあてにならない如く、財産も、あてにならない。地位も、あてにはならない。

さても、立派な構へではある。』と、人の驚く邸宅も、無常を知つた眼には、たゞ一團の灰とも見えやう。衣類、諸道具を調へるのは、火事の焚きつけを調へるのである。金を貯へるのは、盜人に獲物を供へるのである。あてになつたものではない。この身からが、朝の紅顏、夕の白骨、あてになつたものではない。

斯くいふのは、一切、物を持つな、といふのではない。持つなら、あてにせずに持て、といふのである。あてにせずに、財産を持つ。その財産が、灰になつても、失望はない。乃至、あてにせずに、衣類、諸道具を持つ、その衣類、諸道具が、煙と消えても、失望はない。これを稱して、「常に諦めてゐる。」といふ。事に諦めてゐるのは、失望なく、落膽なく、常極樂の心持ちで、世に處し得る爲めの唯一の手段である。

千軍萬馬の士なる福島正則は、流石に、常に諦めてゐたであらう。然ればこそ配流の釣明に接しても、泣かず、藻搔かず、苦しまず、洒然として、配所へ赴くことが出來たのであらう。

それにしても、我々は、諦めが惡い、諦めは、無常觀から來る。無常觀は佛教の、以て、出發點とする所である。先祖代々、佛教によつて教養せられて來た我々は、夙に、無常觀に徹底して、常に諦めてゐるべき筈、從つて、何事をもあてにせず、何事に出遇つても、蒼くならない筈であるが、先頃の大震、大火

の時など、餘りに、蒼くなり過ぎた。失望、落膽が、ひど過ぎた。昔し、僧涌蓮は、二尊院の坊を借りて住んだ浮木法師が、火を過まつて燒けた時、早速、見舞に行つて、かゝる時、常の心の、動かぬを、終り亂れて、ためしにはせよ。』の諺があつた。「常の心」は、「常に諦めてゐる心」でなければならぬ。常に、世の無常を觀じて、常に諦めてゐる者は、彼あした際にも、爽然、平然たるべき理である我々は、今一段、諦めの修養を積む必要があらう。

七の二六　鬼棲む空屋

◇渡る世間に鬼はない。「日本俚諺」

『彼處の空屋には、鬼が、棲んでゐる。』と、專らの噂に、力自慢、膽力自慢の男が、

「よし、俺が、實否を確めてやらう。」と、或る夜、その空屋へやつて行つた。

時に、今一人、同じ、强がり屋があつて、これ亦た、空屋へ出かけ、門を開けて入らうとすると、前の男は、

『それ、鬼が來た。』と、懸命に扉を押へた。後の男も、中にゐるのを、鬼と合點して、

「こゝ開けられては、大變！』と、これも、扉を押へ、扉は開かないて、夜が明けた。

乃で、恐々、扉の隙間から覗き合つて、

『何だ、お前は、熊公ぢやないか。』

『然ういふお前は、八公か、おやおや。』と、果ては大笑ひになつたといふ。

× × ×

『物を如實に——ありの儘に見ることは、事實上、不可能である。物は、我々の見る」物であつて、物自身ではない。カーライルは、

黄疸を患ふる者の爲めには、萬物、皆、黄色を呈する。

といつたが、我々は、すべて、黄疸患者である。或ひは、青疸、赤疸、紫疸、

白疽、黑疽の患者である。

斯うした不完全な(?)眼で、人を見るのである。何れが善人で、何れが惡人やら、何れが義人で、何れが似而斯者やら、とんと、判つたものではない、所謂る、

鬼心、闇鬼を生ず。

で、疑ひの眼で見れば、周圍の人は、すべて、鬼である。而も、それは、眼が惡いのである。疑ふ心が、惡いのである。鬼は、空屋に棲まないで、熊公、八公の疑心の中に棲んでゐた。

周圍の人が、皆な鬼なら、この世は、正しく、地獄である。諺に、

人は盜人、明日は雨降り。

といふが、若し事實なら、我々は、現在、刑務所にゐるのである。

然し、我々は、然ういふことに考へたくない。「考へたくない」といふばかりではなく、その考へは、明に、間違つてゐる。疑ふから、周圍の人が、悉く、惡人になつてしまふ。致る處に、鬼が棲む。世界中が、安達ヶ原の黑塚になつてしまふ。疑ふ心を去つて見れば、渡る世間に鬼はないのである。

鬼はない。然し、佛があるのか否かは、別の問題として、殘して置かなければならぬ。人間は、人間である。鬼でもなく、佛でもない。人は、思つた程、善人でもなければ、思つた程、惡人でもない——差し當り、これ位ゐの所で、止めたい。

七の二七　自然任せの淡生涯

◇深草の、元政坊は、死なれたり。我が身ながらも、哀れなりけり。

「元政上人」

「不幸にして世を背ける、墨の衣にはあらず、髮を結はせるむづかしさに、頭を剃り、茅の軒端、竹の柱に、身を輕く、爰にとめをき、樂む心から、浮世を見るに、東西に走り、南北に行く人、多くは、身を思ふ事業にのみ、足を空にして、

吉野の花のあはれをも知らず、深草の鶉の聲を聞いても、燒いてしてやりたいとばかり思ひ、後に何になることぞや。

かく靜かならぬ事に、人間のみにあらず。山を出る雲は、雨を催さんとて、岫を出で、深山の鹿は、妻戀ふ世話に、聲の限を鳴き明す。

是を思ふに、此身程、隙に、樂なことなし。惠心の作の佛一體もてども、後生を賴ふためにもあらず、持ち傳へたる道具なれば、御宿申すまでなり。極樂へ行きて樂みたいといふ慾がなければ、地極へ落ちる恐れもなし。死ぬる迄生きて居やうと思へば、年のよるも、へちまとも思はず、雛のこほれ種の朝顏も、ゆまがうが、すぢらうが、あんなものと思ひ、時雨ふる夜の小夜嵐、吹かうと、吹くまいと、我が身ひとりの苦にもならず、膝を容るゝ二枚敷一つにて事足り、雜煮くはぬ身には聞かせまいとはいはぬ鶯の聲も、快く聞き、夜着もたぬ家にはさすまいともいはぬ。依故最負のない、窓もる月をながめ、寢る筈の目なれば、眠たければ、晝も、かきこもり、あるく筈の足なれば、手の奴、足の乘物、心の行く所へ迷ひありけれど盗みせぬ身なれば、人も咎めず、覺えたことなければ忘れる

こともなし。歳を數へたことなければ、幾つやら知ず。あら樂や、人めが人と思はねば、人をも人と思はざりけり。

深草の、元政坊は、死なれたり。我身ながらも、哀れなりけり。「元政上人」

× × ×

これは、「元政上人の壁書」として、有名なものであるが、一說には、後人の僞作であらう、といふ。元政の傳記などから考へると、この文、成程、元政の文ではない。吾等も、その僞作であることを疑はぬ。

が、面白い。面白ければこそ、古く世に、傳誦せられてゐるのである。

どこが、面白いか。自然任せの心持ちが、躍如として、現はれてゐる。自然に任せて、少しも、私を挿まず、天命に安んじて、老いるが儘に老い、死ぬるが儘に死なうといふ。淡然たる心持ちが、十二分に看取される。そこが面白い。

平生、名利の途に狂奔して、寧日のない俗人には、この文、確かに、一服の清涼劑を服するに足らう。

七の二八　手車の翁

◇小車の、めぐり〳〵て、今こゝに、立てたる卒塔婆、これはおれがのぢや。

「手車翁」

享保の初め、京に、手車といふものを賣る、翁があつた。絲で廻して、

『これは、誰れがのぢや？』といふと、

『これは、俺がのぢや。』と答へて、子供等が、買つて、頑具にする。であるから

この翁が來ると、子供等が集まつて、大喜こびをした。

その後ら、大阪へ行つて、やはり、賣ること例の如くであつたが、終に、或る

家の軒の下に端坐して死んだ。傍に立てた小さい卒塔婆に、

小車の、めぐり〳〵て、今こゝに、立てたる卒塔婆、これはおのがのぢや。

『何ういふ人が、世を弄んで、そんな事をしてゐたものかと不思議がる者もあ

つた。

× × ×

人、常に「我がもの」といふ。我が財産、我が家、我が屋敷。我が田、我が地

所、我が金時計と、やたら「我が」を振り廻し、所有權を楯に取つて、人には一

指をも差させじとする。

けれど、先だつてのやうな大震、大火に罹つては、その「我が」も、何にもな

らない。大火事に向つて、

『これは、我がものだ。俺の所有權に屬するぞ。』と頑張つて見ても、先方は、一

向、平氣なもの、人が、命より二番目位ゐに思つてゐる金銀、財寶にも、たゞの

燃料とのみ見做して、片つ端から、灰にしてしまふ。我が物が、どこに在る？

所有權が、どこに在る。

我がものなら、我が自分になりさうなものである。我れに屬する所有權なら我

が心に任せさうなものである。然う行かない所を見ると、我がもの、必らずしも

我がものではないのである。所有權にも制限があつて、その一小部分は、我れに

屬するのも、知れぬが、他の大部分は、天に屬するのである。
極端にいつて、世界に、眞に我がものとすべきものは、何一つ、ありはせぬ。
強ひて求めるならば、たゞ一基の卒塔婆があるばかり！
否、その卒塔婆さへも、やがては腐つて、土となる。卒塔婆に先だつて、第一
この身か土となる。
西行も、牛もおやまも、何もかも、土のばけたる、いなり街道。「一休和尚」
人間、畢竟、土の化けもの、土から出で、土へ還る。土筆と變りはない。我が
もの顔が見て呆れる。
世は、輕く思ぶべきである。物は、輕く持つべきである。

七の二九　藤原惺窩の寛弘仁慈

◇我が身なば、我が思ふには、任せぬを、人を心に任すべしやは。「無住法師」

藤原惺窩、我が國近世の儒學の祖である。德川時代に、儒學が、勃興して、能く、人心教化の具となつたのは、その由來、この人に在るといつてよい。
惺窩は、爲人、極めて寛弘な、仁慈な人であつた。或る時、訪れて來た人が窓の外に、蜂の巣があるのを見て、
『手前が、殺してやりませう。』と、起ちにかゝると、
『否、螫しも何うもせぬ。一向、邪魔になるものでもないから、捨て、置きます。お止めなさい。殺すのは、宜しくないからといふのを肯かずに、扇子を執つて、撲ち落した。惺窩ば、靜かに、その蜂を放ち、爾來、その人との交際を絶つた。
その無慈悲な、狹量な所爲を、苦々しく思つたのである。亦た以て、その爲人を窺ふことが出來る。

× × ×

世界は廣い。窓の外の蜂の巣が、何の、邪魔にならうて、螫さない限り、打ち捨て置いて然るべきで、これを邪魔にし、無慈悲に撲ち殺すなどは、狹量の沙汰である。

世界は廣い。けれど、度量が狹いと、廣い世界が、狹くなつて、何もかも、邪魔になる。蜂の巣どころか、人間が邪魔になる。

これを世間の實狀に見る。どこの家でも、姑は、嫁を邪魔にして、嫁は、小舅を邪魔にする。細君は、居候を邪魔にして、女中は、猫を邪魔にする。番頭は、手代を邪魔にして、丁稚は、番頭を邪魔にする。夫は、妻の膨れ面を邪魔にして妻は、夫の圍ひものを邪魔にする。

一家の內が、然うである。一歩、敷居の外へ出ると、向ほ甚はだしいものがある。米屋は米屋同士、酒屋は酒屋同士、互ひに、商賣敵になつて、邪魔にし合ふ。町內の八兵衞は杢兵衞の邪魔にする所であつて、大家の內儀さんは、裏店連一統の邪魔にする所である。

その他、役所へ行つても、會社へ行つても、工場へ行つても、學校へ行つても苟くも、人間の十人、二十人と集まつてゐる處には、或ひは俗人と俗人の間に、或は黨類と黨類との間に、所謂る暗鬪なるものがあつて、敵となり、味方となり邪魔にし合つた揚句には、往々、暗鬪から明鬪に移る。皆、狹量の致す所である。

世界は廣い。世界の廣い如く、度量を廣くして、何人をも邪魔にせず、何人とも、圓滿に交はるのは、廣い世界を廣く渡るので、亦た、人生の一快事でなければならぬ。勉めよ人！

七の三〇 財産二つ割り

◇十指の交も彈くは、一拳の打つに如かず。「西洋俚諺」

或る金持ち、臨終の枕元へ、二人の子を呼んで、『俺が死んだら、家の財産を、平等に分けて取れ。』と遺言し、そのまゝ、息を引き取つた、

所が野邊の送りも濟んで、愈よ、財産分割の段となると、大小、輕重が出來て到底、同じやうには行かない。大きに困つてゐると、一人の老人があつて、

『そりや、何でもない事ぢや。俺に任せたがよい。』と、先づ、十間間口の家は中央、五間のところから、二つに割り、衣服は、脊筋から二つに裂き、その他、夜

具、蒲團、箪笥、長持ち、勝手道具の摺鉢、俎、庖丁、皿、鉢から、書畫、骨董の類、藥罐、鐵瓶に至る迄、一切の物を、中央から兩斷して、

『さあ、これで平等ぢや。』

× × ×

『十指の交も彈くは、一拳の打つに如かず。』——十本の指も、これを纒めて、一つの拳にする時にのみ、力がある。十本つゞ、交る交るに打つたのでは、何の到き目もありはせぬ。恐ろしいのは、たゞ、協同の力である。

協同の力の恐ろしさは、今の分業制度に於て、最も明白である。分業といへば力を分つことのやうに思はれるが、實は、力を合せるのである。大勢の者が、一つの仕事の部分々々を受け持つて、協同的に働くのが、今の分業制度で、斯くてこそ。仕事に捗が行く。或る工場で、十人の職人が。分業的に——協同的に働くことに依つて、一日に、ピンを十萬本、造り上げる。然るに、單獨の働きでは、一人の製造力、一日、僅かに二百本で、十人も合せても、やつと、二千本が、關の山とか。以て、協同の力の、如何に恐ろしいものであるかを、知ることが出來

やう。

然し、工場のみの事ではない。家内の者が、よく協同すると否とによつて、その家の盛衰が岐れる。主人夫婦を初め、番頭、子僧、女中迄が、心を協せ、力を戮せて、初めて、家の繁榮を望むことが出來るので、夫婦は内喧嘩、番頭以下も互ひに角突合、といふ風では追つけ、門前に雀羅を張つて、軒の下には、ぺんぺん草が生へるは必定、身上仕舞が落ちである。

その他、各方面の事が、皆な、これである。先頃のやうな大震、大火にも、町内の者が、協同的に働くことに依つて、禍ひを輕くすることが出來る。現に、或る町内では、青年團とかが、協同一致、全力を擧げて、防火に努めた甲斐があつて、東西南北、皆燒原のたゞ中に、その町一千何百戸だけは、無事に舊態を留めてゐる、などの例もある。

これに鑑みて、災後の復興事業は、協同事業でなければならぬ、官民の協同は勿論、同業組合、町内同士、その他、各種の團體が、相協同して、事に當るのでなければ、復興事業も、捗々しくは行くまい。

我慢な人があつて、

『何、俺には力がある。人なんか、あてにはしないさ。』と威張るかも知れぬ。けれど、一人の力は、知つてゐる。世人の語にも、

蒼蠅の飛ぶは、數萬に過ぎず。騏驥の尾に附せば、乃はち、千里の路に騰る。

とあつて、無力の者も、協同すれば、功を成し、有力の人も、單獨では、功を成さぬ。

『人』といふ字を見ても解らう。人は、人と相倚り相助けて——相協同して、事を爲すべきもので、單獨の一人は、實は、半人である。半分の人である。半分に割られた家へ半分に裂かれた衣服が、用をしないと同樣、半分だけの人では、何事をも成し得ないに定つてゐる。我慢は、處世上の禁物である。禽獸ですら相互扶助の道がある、相互扶助は、協同である。他と協同し得ない人は、恐らく、禽獸にも劣りはせぬか。戒しめなければならぬ。

七の三一　世の妨げを爲すもの

◇惡魔は、十字架の後ろに隱る。「西洋俚諺」

『今の世の出家達ち、身のすぎはいの媒に、佛法を說くによりて、皆人、心迷ふなり。釋迦如來の直の弟子、阿難、迦葉を始めて、欲に心を汚されまじき爲めに一物をも身に貯へずして、毎日、乞食に出で、その日〳〵の食ばかり求め玉ふ。今時の出家たち、財寶をつみ貯へ、堂、寺に金銀を鏤め、綾、錦を身に纏ひて、祈りきとうを爲して、後世を助けんと云ひて、人の心を迷はすること、佛の本意にもあちず。まして、神道の心にも叶はず。世の妨をなすものは、出家の道なり。』(藤原惺窩)

× × ×

『今の世の出家達ち、身のすぎはひの媒に、佛法を說くによりて、皆人、心迷ふ

なり。――大正今日の僧侶が、亦た同斷で、殊にその甚だしいものがある。乃木將軍は、商人と僧侶とを最も嫌つた。人があつて、その理由を尋ねると。

『彼等は、嘘をつくから。』と答へたと。ゆにも、と思はるゝ。

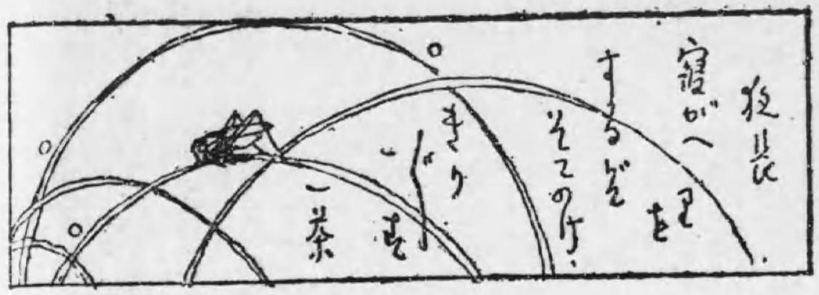
僧侶の墮落は、その原因、信仰がないといふに歸する。俗より出でて、俗より俗に、嘘八百を利器として、善男、善女の淨財を掠め取り、貯蓄をこれ事とし、金襴、綾、錦の法衣美々しく、世間を欺いて、一廉の知識顔する所以のもの、因る所を究むれば、主として、信仰のないことに歸する。

僧侶の職は、人に信仰を勸めるに在る。自身、信仰のない僧侶、何として、人に信仰を勸め得やう？ 彼等の仕事は、葬式の番人たることに限られざるを得ぬ。

が、それでは、世間が、承知しない。よくも、識者が、承知しない。彼等を目して、無用の長物、否、無用の長虚とするのは、既に、久しいことである。

こゝに於ては、世渡りに抜け目のない。近來の僧侶は、社會問題、社會事業にその逃げ場所を發見し、この方面に力を入れるらしく裝つて、以て、己れの存在の理由を明かにしやうとかゝつてゐる。巧く、胡麻化し終せることか。

吾等の見る所、今の僧侶が、社會問題などに首を突つ込むのは、これ亦た、信仰のない結果である。法を說き、信仰を勸めるといふ、彼等の本職に違ふ。法を說き、信仰を勸めることによつて、人心を教化し、世をして、七面倒な社會問題に煩はされざらしめるのはよい。自ら、法衣の袖を捲つて、大童になり、斯うした事に狂奔するのは、過ぎたりとしなければならぬ。亦た、信仰のない證據である。



八の一　奇人饑ゑを恐れず

◇吾れあれば、則はち、死なし。死あれば、則はち、吾れなし。吾れ、焉んぞ死を懼れんや。「弘法大師」

中山忠宣、伊勢から志摩の方へ遊んだ或る年、或る山中で、一奇人に遇つた。人跡絶えたる處に、庵を結び、年も老いたのが、色々の物語の末に、さていふやうに、

『この前の谷川に、水が出て、橋が落ちたが最期、食い物を求めぬ通路がなくなる。それのみ、心にかゝつたが、この頃は、大に悟つて、命のある限りは、食い物があらう。食ひ物がなくなるのは、命のなくなる時ぢや、と思ひ定めたので、大層、樂になつたとの言葉に、流石の忠宣も、謄を驚かしたとか。

食のある限りは、命がある。食の心配は、無用である。食の盡きる時は、命の盡きる時である。既に、命の盡きた上は、食の心配など、亦た、無用である食と命とは、期終始して、曾つて、離れることがない。人間、汝して、飢ゑるものではない。

飢ゑるものでない如く、又た、死ぬものでもない。『吾れあれば、則はち、死なし。死あれば、則はち、吾れなし。』——誰れが、死に會するか。死の恐ろしさはたゞ、想像の裡に在つて、何んな姿をしてゐるものやら、生きてゐる間は、勿論出遇はず、死ねば、これ亦た、出遇はない。『吾れ、安くぞ死を懼れんや。』である

飢ゑもせず、死にもせず。さてさて、あり難い身の上かな！

八の二　胡麻の蒔き損ひ

◇蒔かぬ種は生へぬ。「日本俚諺」

胡麻は、熬つて使ふ。或る愚人、

『一々、熬るのは、面倒だ。熬つた種を蒔いたら、その手數が省けやう。』と飛んだ便活を考へたが、結局、種を無駄にして、

『おやおや！』

× × ×

蒔かぬ種の生へぬは勿論、縱し、蒔いても、惡い種では、やはり、生へない。

一攫千金夢みての相場事、多年の慾からする善、成功を急ぐ故の收賄、砂利喰ひ結婚したさの駈落、昇給を望みのお髯の塵拂ひ・有力者の觀心を買ふ爲めのお世辭、おべつか——皆な、種が惡い。熬つて蒔いた胡麻の種と同樣、恐らく生へはせぬ。稀れに生へるのは、世間のお笑ひ草で、希望の實は、所詮、結ばない。

◇思ふこと語り合せむほとゝぎす
げにうれしくも西へ行くかな

三位中將重衡

八の三　小野寺十内の書

◇殘りなく、散るぞめでたき、さくら花、ありて世の中、はての憂ければ。

「古今集」

『六日、七日之文、夕べ、一どに屆申候。母樣、何事なふ御座成され候よし、御嬉しく存候。隨分、心をつけて、朝夕をうまきやうにして進じ申さる可く候。そもじ、おいよ、無事、一だんの事にて候。此元の事、氣遣ひのよし、尤に存候。嘸々と思ひやり參らせ候。

……われらは存じの通、御當家のはじめより、小身ながら。今まで百年の御恩にて、各をやしなひ、身もあたゝかに暮し申候。今の內匠頭殿には、かく別の御なさけにはあづからず候得共、代々の御主人、くるめて百年の報恩、又は、身、ふせうにても、一族も、日本國に多く候。かやうの時にうろつきては、家の毀、一

門のつらよごし、面目なく候ゆへ、節にいりたらば、いさましく死ぬべしと、たしかに思ひきわめ申候。老母を忘れ、妻子を思はぬにてはなけれども、武士のぎりの命を捨る道は、是非に及び申さゞる所をがつてんして、深くなけき給ふべからず。母御人様、いく程の間も有まじく候まゝいかやうにもして、御りんじうを見屆給るべく候。年月の心入にて、ぢよさい有べしとは、露ちり思はず、申に及ばず候へども、賴み參らせ候。わづかの金銀、かざい、これをあり切に、よういくし參らせ、御命、存外ながく、たからつきたらば、ともにうへ死申さるべく候。是も、ぜひに及ばず候。おいる事、望のお方もありつれど、やまひよくなりての事と思ひ、一日〳〵と延々にして、其事なくて、今、此やうの時節に成候て、今更、しんじ申すべしとも申べきにあらず、人も、うけとるべきにもなければ、そもじともに、いかやうにもながらへて、又、世の中の有さまをも、見申さるべく候。

一、扨々世の中の有さま、むかし語りに聞候、上るりの人形、太平記のやうのものにて見聞候ふぜい、今、此身になりて候。誠に、風のまへのともし火、巢末

の露あらそふ命となり、日頃、よろづに付てふかゝりしよくをわすれ、心のきよき事、こほりの如くにて、わざはひ、却て、出離の緣と覺候。

……

一、金拾圓、遣し申候。御納戸長兵衞、娘子迎ひに參候まゝ、賴て遣し候。いのちつなぎの爲にて候。また〳〵、遣し申べく候。此方には、一もんも入申さず候。申に及ばず候へども、わずかの金銀にても、誰どのにも預申間敷候。手をはなさずおいて、これきりの露命つなぎにめさるべく候。かならず〳〵にて候。外に書付の通り、出し申候。おいよへも同じ事にたのみ申候。かしく。（小野寺十内）

× × ×

久しく、京都藩邸の留守居を勤めてゐた小野寺十内は、主家の凶變を耳にすると、具足一領、白帷子一つ、當分の着替へ一つを挾箱に入れ、母にも告げず、妻にも語らず、急ぎ、赤穗へ馳せ着けた。越えて數日、妻たん女に寄せたもの、即はち、この書である。多感多血の人、母を憂ひ、妻を思ふ心は、人一倍、深且つ切なるものがありながら、君臣の義は、廢するを得ぬ。武士の道は、棄つるを得

ぬ。まことに、一字一涙の文、人をして卒讀に堪へざらしむる。

取り分け、『わづかの金銀、かざい、これをあり切に、よういくし參らせ、御命存外ながく、たからつきたれば、ともにうへ死申さるべくに。』又た、『金拾圓、遣し申に……手をはなさずおいて、これきりの御命つなぎにめさるべくに。』といふ邊り、何等、痛切の辭であらう？　金も盡き、食も盡きれば、死ぬの外はない定り切つたことではあるが、篤と、天命を知つた者もなければ、この斷言は爲し得ない。十内は、確かに、天命を知つてゐた。天命を知つてゐたればこそ、大事に臨んで、能く、去就を誤まらなかつたのである。

八の四　蜀山人の一歌

◇氣振ふ者は文、求めずして至る。「齋藤拙堂」

太田南畝、名は覃、字は子耜、通稱直次郎、後ち七郎左衞門と改めた。雅號の

幾つもあつた中に、最も、蜀山人、又は、寢呆け先生で知られてゐる。代々、徒士を以て、幕府に仕へ、微錄ながら、當時の大儒内山椿山、澤田東江などに就いて、和漢の學を修め、學問所の試驗には、甲科を及第し、支配勘定役として登用せられた。

が、その本領は、狂歌師たるに在つて、當意卽妙、滑稽洒脫、容易に人の追從を許さなかつた。

或る日、山谷の八百善に遊び、小萬といふ藝妓を聘んだ。この妓、縹致もよし藝もありといふ尤物であつたが、何うしたわけか　一向、流行らない。蜀山人、それを聞くと、

『よし、俺が、流行るやうにしてやらう。』と筆を揮つて、三味線の胴に、

詩は詩佛、書は米庵に、狂歌おれ、藝妓小萬に、料理八百善。

と書きつけた。すると、この事が評判になつて、前のお茶曳き藝妓、忽ち、流行つ妓になつたといふ。

自ら任ずる所も、人の見る目も、蜀山人は、當時、數ある狂歌師中の第一人者

であつたのである。

× × ×

これを一種の文學として、狂歌に何程の價値があるかは、吾等は知らぬ。左に右、面白いものである。

面白いにも、色々ある。他人の手に成つたものには、駄酒落、地口に屬するが多く、中には、卑俗で、猥褻で、殆んど、聞くに堪へないやうなのも、少からずある。蜀山人のは、概して、上品である。その最も傑れたものは、高尚優美、典雅温裕、加ふるに、含蓄の豐かなるを以てして、一誦、三嘆に堪へない妙味を持つてゐる。

といふのが、彼れは、小身ながらも、武家の出て、家に在つては、一通り、武士としての教育を受け、他へ出ては、略ぼ、時の大儒に學んで、而も、天性、利害に淡く、或る程度迄、脫俗してゐた。他の狂歌師、戲作者らとは、甚はだ、撰を異にしてゐた。その狂歌に、見るべきものの多かつた所以である。

書や、畫や、詩や、歌や、皆、單なる技術ではない。俳句、川柳、而して、狂

歌に至る迄、すべて、心の聲である。それを作るに先だつて、心を作る必要がある。何事にも、精神の修養が先に立つ。蜀山人の事、以て、證とするに足らう。

八の五　蜀山人の壁書

◇盲も人の世の中。「蜀山人」

蜀山人の名が、全國に響き渡ると、書を乞ふ者が、日々に相踵ぎ、流石の山人も、殆んど、煩殺されんとした。これではならぬと、彼れが、壁上に掲げ出したは、

年來、我が書を請ふ者多し。扇子、團扇、額、屏風、袱紗、唐紙、和唐紙、いやな羽織の裏に至る迄、累々として果しなければ、我れ、そのうるさきによりて、上、中、下の品を定む。上は、逸かに書くべく、中は預り置くべし、下に至りては、書くべからず。若し、聞かずして、預け置く者あらば、

扇は、鼠の食むに委せ、紙は、反古堆中に沈めて、永劫、浮ぶ瀬なかるへし。

といふ前書の下に、

上の部

一、詩歌の心をも辨へたる人。

一、詩歌の心は知らねども、甚はだ、これを信じて、貯へ置く人。

一、名人の畫讃。

一、表裝、至つて美裝にて、掛物にする人。

一、至つて美人の直賴み、中位るにては、不承知なり。又賴みにては、受け取らず。

中の部

一、詩歌の好みなく、何口でも宜しき、といふ人。

一、人にやるにてもなく、自ら收め置くといふ人。

一、扇一二本、短冊二三枚、唐紙一二枚好む人。

下の部

一、惡畫、惡紙、和紙、唐紙を辨へざる人。

一、遠國へ近く旅立つ人に贈るといふ人。

一、小肴の價高ければ、扇に書かせてやるが德用といふ人。

一、何か一向分らねども、書かせて置くが得と心得て、無性に書かせる人。

この類ひ、婦人に多し。

一、筋違御門外の古道屋、山下邊りへ賣る人。

終りに、

この外、いやな事だらけにて、見るもうるさきが多し。あたら、光陰を費して、慾深き者の眼を悅ばしむるに忍びず。仍而、壁書如件。

と記して、筆を留めた。

× × ×

書畫は、眼のある者が、見て娛しむ爲めのものである。眼のない者が、單に、家の道具と心得、又は、人に誇らんが爲めに、備へるべきものではない。近來の金持ちは、頻りに、書畫を買ひ集める。眼があつての事か。眼がなくての事か。娛

しむのか。自慢の道具か。蜀山人の壁書中、上の部か、中の部か、下の部かは、甚はだ覺束なく思はれるが、大正の今日、眼のない金持ちに顔を澁める蜀山人はあるまい。金持ち先生、意を安んじて、大に書かせるべしである。

八の六　己惚れ男

◇滿は、損を招き、謙は、益を受く。「書經」

己惚れ男、平生、

『俺は、世界一の美人でなきや、女房にしない。』と威張つてゐたが、或る時、王様の行列を拜觀すると、中に一人、駕籠に乘つた、素敵な美人がゐて、その美しさは、殆んど、輝くばかりである。友だちに、

『あの美人、何者だらう？』と訊くと、

『王女よ、美人だらう？』といふ。

『美人だ。あれなら、女房にしてもいゝね。』

『王様にお願ひして、貰つて來てやらうか。』

王様は、僕をよく御存じだから、僕が賴めば、話は、大丈夫纏まるよ、

『ぢや、盡力して呉れ給へ。』と、熱心に依賴して、千兩餘りの運動費を渡した。

友だちは、無論、奔走なんかしはしない。半年の後ち、己惚れ男を訪ねて、

『君、駄目だよ。』

『何うして？』

『だつて、王様がいけない、といはれるのだ。』

『ぢや、姫君は？』

『まだ、それ迄は紀さないがね。』

『然うか。殘念だなあ！　王様さへ御承知なら、姫君は、必ず、可厭とはいはれないんだが……』と、溜息を吐いた。

× × ×

人は、時々、法外な望みを起したり、無理をしたり、危險な事に手を出したり

する。因はといへば、大概、已惚れに在る。自分を高く評價し、自分の實力を過信するにある。横に車の押せない限り、そんな事の成就しやうわけはない。自ら知つて、謙抑すること、これ、人間安全の道である。

八の七　太公の人物鑑定

◇之れに告ぐるに、難を以てして、以て、其の勇を觀る。「六韜」

『太公曰く、士を知るに、徵あり。一に曰く、之れに問ふに、言を以てして、以て、其の辭を觀る。二に曰く、之れを窮するに、辭を以てして、以て、其の變を觀る。三に曰く、之れに間諜を興へて、以て、其の誠を觀る。四に曰く、明白顯問、以て、其の德を觀る。五に曰く、之を使ふに、財を以てして、以て、其の廉を觀る。六に曰く、之れを試むるに、色を以てして、以て、其の貞を觀る。七に曰く、之れに告ぐるに、難を以てして、以て、其の勇を觀る。八に曰く、之れを

醉はしむるに、酒を以てして、以て、其の態を觀る。八徵、皆備はれば、則はち賢不肖別る。（六韜）

× × ×

『人は見かけによらぬもの。（日本俚諺）である。外貌、外見を以て、人を取捨すれば、大概は、中らない。直ちに、內心に迫つて、これを叩き、これを試みて、初めて、その善惡、賢不肖を知ることが出來る。

が、叩りに、人を試みることは、宜しくない。人を試みるのは、人の氣を引いて見るのである。小人の爲である。丈夫の人に接する、磊々落々、已れの誠を以てすればよい。公明正大、俯仰して天地に恥づる所がなければ、相手の何者たるに拘はらず、たゞ、いはんとする所をいへばよい。爲さんと欲する所を爲せばよい。相手を試み、相手の氣を引いて見て、然る後ち、此方の態度を決めるなどは決して、丈夫の事ではない。

然り、『叩りに、』人を試みるのは、よくないが、『已むを得ずして、』人を試みる場合もあらう。有爲の善人を採用して、自分の用をさせる、といふやうな場合には

是非、人を試みる必要がある。加藤清正は、勇士を得ることに苦心して、人相見の稽古をさへしたといふ。人相見など、あてにはならぬ。寧ろ、太公の方法を以てするに如かぬ。

八の八　横井小楠の機智

◇小なる事は、分別せよ。大なる事は、驚くべからず。「徳川光圀」

勝海舟は、嘗つて、横井小楠を評して、『小楠は、佐久間象山よりも偉い。象山は、文筆の人に過ぎぬ。小楠は、見識の人だ。』といつた。見識の人――これが、世の定評である。

夙に、開國論を唱へたのも、見識の優れてゐた結果である。

從つて、機智にも富んでゐた。或る時、二三の友だちと、江戸常盤橋の外の一旗亭で飲んでゐると、土佐藩士と號する者が五人、

『お目にかゝりたい。』とやつて來た。小楠は、早くも、刺客と察して、階下へ避け、ぶつさき羽織脱ぎ捨て、帶を貝の口に結び直し、手拭を肩にかけ、敵の目の光らせてゐる門口を、腰低く、

『御免下さい。』といつて出て、その儘、姿を隱した。敵は、小楠の風俗に欺かれて、料理番か、近所の遊び人位ゐに思つたのであらう。

× × ×

『小なる事は、分別せよ。大なる事は、驚くべからず。』――けれど、十人か九人迄、小なる事は、侮つてかゝり、特に分別することもなく、輕卒にやつて除けて、思はぬ失敗をする。所謂る、

油斷大敵。「日本俚諺」

なるものである。

反對に、大なる事は、たゞたゞ、驚いてしまふ。周案狼狽、爲す所を知らずで、智慧も、分別も、出るものでなく、爲に、免れられる災難を、得免れず、命迄も失ふ例は、世間、甚はだ少くない。

驚いたのでは、分別は出ない、人は、小楠の機智に感心する。吾等は、死生の一大事に臨んで、些か驚く所なく、段々として身を處しだ、小楠の沈着、落ちつきぶりに敬服する。此の落ちつきがあつたればこそ、彼の機智があつたのである。知らず、小楠は、那の邊から、這般の落ちつきを得たか。蓋し、平生の修養に依ることで、痩せ我慢や強がりなどいふ、附燒刃の及ぶ所ではない。

吾等の見る所、所謂る修養は、超脱の修養である。無我にして、死生に囚はれず、無心にして、不利に束縛されなければ、能く事の自然に任せで、如何なる運命に會しても、これに安んじ、これに甘んじて、少しも驚かずにゐられる。或る悟道僧は、首に白刃を擬せれながら、

四大本無主。　五蘊本來空。
將首臨白刃。　猶如斬三春風。

（四大、本と、主なし。五、蘊本來、空なり。首を將つて、白刃に臨む猶ほ、春風を斬るが如し。）

とばかり、夷然としてゐたといふ。死生の大事も、尙ほ且つ、斯くの如くである。

る。況んや、利害得失が、何であらう？　毀譽褒貶が、何であらう？　彼れの此れを見るは、全然、他人の事である。他界の事である。

向ふ河岸の火事。「日本俚諺」

と一般、少しも、心を煩はすに足らぬ。

人は、斯くの如くにして、大事に堪へ、大事に當ることが出來る。超脱なるかな！　無我なるかな！

八の九　盛親僧都の傍若無人

◇人めが人と思はねば、人をも人と思はざりけり。「元政上人」

昔し、京都仁和寺中の眞乘院に、盛親僧都といふ、知識があつた。（芋頭――里芋の莖の地中に在る部分――が好きで、隨分よく食つた。談義の座でも、書を讀むにも、大きな鉢に堆く盛り、膝下に置いて、食ひながら談じ、食ひながら讀む。

病氣に罹ると、七日、二七日位ゐ、療治といつて引き籠り、よい芋頭を擇んで、思ふざま、多く食つて、癒してしまふ。人には食はせないで、自分一人で食ふ、といふ風であつた。

極めて貧乏であつたが、師の僧の死際に、錢二百貫と坊一つとを讓られると、坊を百貫に賣つて、都合三萬疋の錢を得た。乃で、それを芋頭の錢と定めて、京都の人に預け置き、十貫づつ、取り寄せ、乏しからず食ふ程に、他事には少しも費はないで、三百貫の錢も、皆無になつてしまつた。知らない者は、

『貧しい身に、三百貫の錢を儲げて、そのやうに計はれたのは、まことにあり難い道心者だ』と感心した。

或る法師を見て、「白瓜」といふ綽名を命けた。人が、

『白瓜つて、何ですか。』と問ふと、

『否、愚僧も知らぬ。若し、白瓜といふものがあつたら、この坊主の類に似てゐるぢやろ。』と答へた。

盛親、は容貌が立派で、力が強くて、大食で、書道、學問、辯舌、すべて人に

優れ、宗門の法燈であつたから、寺中でも、重く思はれたが、何分、世を輕く思つた曲者で、萬事、自由自在に振る舞ひ、人に從ふといふことがなつた。

例へば、饗膳などに就く時、膳が一同へ行き渡らない中に、自分の分を、さつさと食ふ。歸りたければ、ついと起つて、一人で歸る。常の食事も、人のやうに定めては食はず、食ひたければ、夜半にでも、曉方にでも食ふ、睡ければ、晝でも搔ぎ籠り、何んな大事件があらうとも、その間は、人の言葉を聞き入れない。目が覺めれば、幾夜も寢ず、心を澄して、嘯き歩くなど、常の行動、甚はた、尋常と異なつてゐた。

× × ×

盛親僧都は、まことに世を輕く思つた曲者であつた。貴賤、貧富、利害得失、毀譽褒貶、習慣禮法などを輕く思つて、これ等のもの、一切、頓着するに足らんとする、これが、卽はち世を輕く思ふのである。彼等の所謂る、超脫の義である、盛親は、超脫してゐた。

超脫は、無我から來る。無我の人は、自ら視ること、塵の如く、芥の如くであ

る。四大の寄せ細工、偶ま、地、水、火、風の物が、因縁によつて相集まり、四肢五體を合成して、乃はち、この身である。これを生と名ける。集まれは散じ、合へば離れる。集は散と、合は離と、表裏を相成して、決して、單獨に存するものではない。集合した四大は、必らず、離散する時がある。これを死と名ける。四大の離合集散を外にして、別に、死もなく、生もない。畢竟して、人は、無である、無我である。四大の因縁合成を外にして、何をか我れとして執着せん？無我の人は、決して、我れに執着せず、塵の如くに嘲り、埃の如くに笑つて已む。

我れさへが、塵である、埃である、苦である。その輕きこと、煙の如くである、況んや、富貴が、何であらう？　貧賤が、何であらう。乃至、無意味な習慣が、何であらう？　形式のみの禮法が、何であらう？　無我の人は、それ等の何ものにも執着せず、何ものにも拘束されない。

從つて、その身を行ふや、全く、縱横自在である。欲して、いはざるなく、欲して行はざるはない。人が笑はうが、譏らうが、一向、平氣の平左衞門である。元政上人の壁書と稱するものに、「人めが人と思はねば、人をも人と思はざり。」と

あるが、眞實、そんな心持ちでゐる。元政上人(○)の心持ちは、亦た、盛親僧都の心持ちであつたに相違ない。

自然、その行動に、傍若無人の嫌ひがある。但だその傍若無人たる、他人のそれが、傲慢に出で、「俺が俺か」に出で、人を馬鹿にするに出でて、全然、我執の爲であるとは違ひ、超脫に出で、淡泊に以で、一切の習慣、禮法に拘束されないに出でて、畢竟、無我の結果である。等しく、傍若無人ながら、彼れは、傲慢に因り、此れは、無我に由る。彼れの、人に嫌はるゝと異なつて、此れの、寛容せらるゝ所以である。盛親僧都が、傍若無人に振舞つて、尙は且つ、世人の尊信を失はなかつたのも、その傍若無人か、無我に由ることで、特に、人を馬鹿にするなどいふ、そんな幻い心持ちがなかつたからである。

これ、他人の學び得ることではない。他人が學べば、

虎を畫いて、猫に類す。「日本俚諺」

がの失敗がある。傍若無人、勝手氣儘に振舞つて、

世の禮法の君子は、虱の褌にをるが如し。「阮藉」

などと、竹林の七賢人を取氣つた所で、世間は、決して、通さない。學ぶべくんば、心を學べ、無我になれ。附燭又は、何にもならない。

八の一〇　何方が馬鹿

◇智慧もかう、常にたゝんで、扇かな「古句」

或る男、ずるい事ばかり考へてゐる。或る日、やくざ馬に乘つて出かけると、向ふから、立派な馬でやつて來る人がある。急に降りて、一寸會釋して、

『少々、御相談を願ひたいのですが……』

『はいはい。』

『肯いてくれますか。』

『何ですか、御相談と仰しやるのは？』

『肯いて下さればいゝのです。』

『肯く肯かないは、お話を承はつた上でなきやねえ……』

『困りましたねえ。』

『困ることはない。何の話だが判らない中は、返辭の仕樣がないでせう……いや、私は、急用をもつてる。失敬します。』と行き過ぎやうとすると、

『あい、もし、』と呼び留めて、

『ぢや、申しませう。』

『早く、おいひなさい。』

『實は、馬の交換を願ひたいのです。』といふと、相手は、此方をぢつと見て、

『貴公、馬鹿ぢやないか。』

『此方は、頭を搔きながら、

『私は、又た、貴方を馬鹿かと思ひましたので……』

× × ×

自分を智者とする者は、愚者である。自分を智者とする者は、愚者である。智者は、自分を愚者とする。故に、謙遜に身を持つて、決して、人を侮らず、

慇懃、以て、これに對する。人は、これを喜んで、却つて、此方を尊敬する。

下る程、人は見上げる、藤の花「古句」

の理で、智者が、自分を愚者とするのは、やがて、自分を智者とする所以である。

萬事に慎みを如へる。輕卒なことをしない。危險を冒さない。從つて、失敗といふことなく、安樂に世を渡る。

油斷せずに、絶えず勉强し、不斷に學問して、己れの愚を濟はうとする。自然、向上又た向上、進渉又た進歩して、底止する所を知らず、結局、大人物にもなる。

過ることを知つて、萬事に、法外な望みを起さない。

人に誹られ、貶され、侮られても、一向、腹が立たぬ。苦痛を感じない。心は、常に春の海の如くに靜かである。

愚者は、自分を智者とする。さては、傲慢の爲めに、人に嫌はれ、馬鹿にされ、不謹愼に事をして失敗し、油斷して、學問を忘り、法外な臨みを起し、他人の毀譽に執着して、餘計に苦しむ。哀れむべきは、愚者である。

八の一一　白樂天の座右銘

◇貴と富とを慕ふ勿れ。賤と貧とを憂ふる如れ。「白樂天」

貴と富とを慕ふ勿れ。賤と貧とを憂ふる勿れ。自ら問ふ、道の如何を。貴賤、安んぞいふに足らん。毀を聞いて、戚々たる勿れ。譽を聞いて、欣々たる勿れ。自ら觀る、行の如何を。毀譽、安んぞ、論ずるに足らん。意を以て、物に傲ることなくし。以て、人に辱めらるゝに遠ざかる。色を以て、事を求むることなくして、以て、自ら、其の身を重んず、遊ぶには、邪と分岐し、居るには、正と隣を爲し、中に於ては、取捨あり。此の外、疎親無し。外を修めて、以て、內に及び、靜かに養ふ、和と眞と。內を養うて、外を遺れず。動率は、義と仁とす。千里、足下に始まり、高山、微塵より起る。吾が道、亦た此くの如し。之れを行ふに、日に新なるを貴び、敢へて、他人を規せず。聊か、自ら、諸神に書し、終身、

且つ、自ら勗め、身沒して、後昆に貽す。後昆、苟くも是れに反せば、我が子孫に非らず。」(白樂天)

× × ×

白樂天の座右銘、その要、貧富は、いふに足らぬ。毀譽は、論ずるに足らぬ。儆るの益もなく、求むるの色もない。善人と交り、善人となる。內は、和と眞とを養ひ、外は、仁と義とを行ふ、といふに在つて、流石は唐の大詩人、何々、誦するに足り、言々、味はふに足るが、最後の一句、「聊か、自ら、諸神に書し、終身、且つ、自ら勗め、身沒して、後昆に貽す。後昆、苟くも、之れに反せば、我が子孫に非ず。」に於て、吾等は、暢然として恐れざるを得ない。

親として、子を愛しない者はない。我が身に代へて、子を思ふのは、すべての親の心である。世人が、鵜の目、鷹の目、利を漁つて、東奔西走、日も亦た足らずの苦勞をするのは單に、已れ一人の榮華の爲めではなくて、又た、子孫の安泰ならんことを願へばである。その心事には、甚はだ憐れむべきものがあるが、西鄕南洲は、

子孫の爲めに、美田を買はか。

といつた。これ、如何？　南洲、果して、子孫に冷淡であつたか。

といふに、然うではない。子孫の爲めに巨富を遺すのは、偶ま、子孫を禍ひするに足る。南洲は、こゝに見る所があつたのであらう。

子孫の爲めに、財を遺すのは、德を遺すに如かぬ。一門、故舊、朋友、知人に目をかけて、これに德を施して置けば、世間、決して、忘恩の徒ばかりでなく、その德に報ゐる者もあらう。子孫は、先づ以て、飢餓するには至るまい。

積善の家には餘慶あり。

とは、こゝの事である。

德を遺すことが出來なければ、切めては、言を遺すに如かぬ。何んな言を遺すか。白樂天は、彼れの如き言を遺した。その要、右の如く、今一段、煎じ詰むれば、

道を憂ひで、貧を憂へず。「孔子」

といふに歸する。

『貧乏してもいゝ。人の毀りなど、いふに足らぬ。何卒、人らしいものになつてくれ。人間、貴いものは、たゞ、心ぢや。仁義の道ぢや。』といふのではあるが、今の親たる者、果して、この言を遺すに堪へるか。

『この世は、金の世だ。金を儲けよ。金を溜めよ。そして、安樂に世を渡れ。それには、お世辭をよくせにやならぬ。殊に、

貴いものには卷かれよ。「日本俚諺」

の用意が肝腎だ。氣概を出すな。意氣地を立てるな。何でも、利巧に立ち廻つて、己むを得ずんば、嘘も吐け。』と、こんな言を遺しはせぬか。

子を愛するのは、親の情である。子孫の爲めを計るのは、父祖の義務である。問題は、如何に愛し、如何に計るかに在る。間違つた愛し方をすると却つて、我が子を賊つてしまい、間違つた計り方をすると、却つて、子孫に禍ひを遺す。

負の引き倒し。「日本俚諺」

にならないやう、よくよく、考慮しなければならぬ。

八の一二　陶侃の瓶運び

◇勞を習ふ。「陶侃」

後漢の陶侃は、幼にして、父を失ひ、且つ、家が、貧乏でめつた。范達が訪ねると、母の湛氏は、髪を截ちそれを賣つて、酒肴を調へた。侃が、世に出だのは、達の推薦による。

斯くて、官を進めて、荆州の刺史となつた時、奸人王敦の爲めに、廣州へ在遷された。その、廣州に在るや、常に、百個の大瓶を備へて置いて、朝は、齊の外へ運び出し、夕は、齊の内へ運び入れるのを日課にした。人が、

『何をなさる？』と尋ねると、

『俺は、今に、力を中原に致す心組でゐる。それ故、勞を習ふのぢや。』と答へた、果せるかな、再び、荆州に鎮し、八洲に都督として、種々偉功を奏した。

× × ×

勞を厭つて、佚に就き、苦を忌んで、樂に從ふ。これ、人情の常である。世間滔々、人情の常とする所に從つて、佚樂をこれ貪り、その禍ひたるを知らぬ。禍ひとは、如何？

平生、佚樂に馴れた者は、纔かの勞苦にも堪へないで、偶ま、勞苦に服するの餘儀なきに至れば、意氣鎖沈、青息、太息、五色の息を吹いてしまふ。

自然、誘惑に罹り易い。その折柄、利害を以て誘ふ者があれば、直ぐ、その方へ靡いてしまふ。節操もなければ、確志もない。定見もなければ、方針もない。主義もなければ、主張もない。あてにならないこと夥だしい。

斯くては、大事を成すなど、思ひもよらぬ。ジョンソンはいつた。

大事は、力に依りて成らず、たゞ、不屈不撓に依る。

と。一旦の勇氣は、以て、大事を成すに足らぬ。智慧や、利巧や、手腕やは、到底、恃むべきものではない。恃むは、たゞ一つ、不屈不撓の精神に在つて、それは、生憎、妄佚に馴れた人世のものではない。

妄佚に馴れないで、勞苦に馴れる——これでなければならない。陶侃は、「勞を習ふ。」といつた。心は、勞苦に馴れるの意である。馴れゝば、勞苦も、勞苦ではない。如何なる運命、如何なる境遇に處しても、妄然として動搖せず、毅然として探守し、初心の儘に、驀進することが出來る。卽はち、大事を成す所以である。將に、中原に事あらんとして、陶侃が、勞を習つたこと、異しむを要せぬ。

八の一三　新井與治右衞門の教訓

◇艱難は德の親である。「プルターク」

新井白石の父與治右衞門は、白石の幼時、常に、これに敎へて、

『男兒は、たゞ、事に堪へることを習ふべきぢや。その習ひ方は、何事にもせよ、自分の最も堪へ難く思ふ事から堪へ始めるに在る。斯やうにして、久しきに及べば、然迄、難事と思ふ事はなくなつてしまふ。』といつた。

この教訓は、餘程、白石を感じさせたと見えて、

我が後の人々、此の事は、我が父の家訓なりと思ひて、萬の事に、此の心得あらんこそ、願はしき事なれ。

と記してゐる。

× × ×

後漢の陶侃は、「勞を習ふ。」といつた。與治右衛門は、「事に堪へることを習へ。」といつた、共に、勞苦に馴れるの意である。

白石は、貧苦徹骨の間に勉强して、一代の大學者、大政治家となつた人である。世間、白石の如くに「苦しむ」者は、多々あるが、白石の如くに「堪へる」者は、滅多にあるまい。白石は、その甚だしい勞苦の間に在つて、探守する所、極めて固く、時の富豪河村隨軒から、娘の聟にと望まれて、これを拒絶し、同門の友岡島某の心事に同情して、大諸侯前田家よりの重聘を、これに讓り、その身は、相變らず、勞苦の中に、勉學を繼續した。不屈不撓の金剛心は、殆んど、古今獨歩に近い。

蓋し、父の教訓に從つて、夙に、勞苦に馴れてゐた白石には、勞苦も勞苦でなく、從つて、爲めに心を動かす必要がなかつたのである。

八の一四　餓ゑたる團子

◇人にせられんと欲ふ如くに、人にも爲せ。「基督」

七月の炎天、燒けつくやうな町中を、

『團子よう團子！　團子は如何？　團子よう！』

と呼び歩く聲が、如何にも苦しさうである。

『團子屋さん、お前、何處か惡いの？　お腹が痛いのだらう？』と訊くと、

『否、何處も惡くはありませんよ。』といふ。

『だつて、大層、苦しさうぢやないか。何故、威勢よく呼ばないのだ？』

『はゝあ。實は、今朝から、物を食はないので、お腹がすつかり空きましたのさ。』

『それなら、お前のその團子を食へばいいのに。』
『所が、全部、腐つてるのでね。』と、團子賣りは、平氣な顔！

× × ×

自分に食へないものを、人に賣りつけるとは、不都合極まる團子賣りかな！
而も、我々小人のしてゐることは、大概、これである。論語に、
子貢、問うて曰く、一言にして、以て、終身、これを行ふべきものあるか。
子曰く、それ、恕か。己れの欲せざる所は、人に施すこと勿れ。
恕は、思ひやりである。己れの欲せない所は、人には施さない――これが、恕である。我々は、人に對して、餘りに、思ひやりがなさ過ぎる。年中、己れの欲しない所を人に施して、己れの欲する所は、惜しんで、人に施さない、我が儘な、勝手な了簡方は、話の團子賣りと同じことである。
自分が儲けたければ、人も儲けたい。自分も儲け、人にも儲けさせたら、よさうなものであるが、然うはしないで、粗惡な品を高價に賣りつけ、自分だけ儲けて、人には損をさせる。二宮尊德は、弟子に敎へて、

『商賣は、賣つて喜び、買つて喜ぶやうにせよ。』といつたが、そんな考へで、商賣してゐる商人は、今日、先づ、絶無に近い。生産者から、品物を買ひ取つたり、職人に仕事をさせたりするにも、先方の弱味につけ込んで、たゞたゞ、廉くとの み心がけ、人を泣かせて、自分だけ儲ける。人の涙で、身上を拵へたとて、名譽でもあるまいが、今の商人には、そんなことをする向が多い。思ひやりがないのである。己れの欲しない所を、人に施すのである。
自分が、譽められたければ、人も、譽められたいであらう。然るに、我々は、人を譽めるよりも、毀る場合が多い。甚はだしきに至つては、人の穩事、秘事を發いて、明るみへ持ち出し、その人に對する、世間の惡感情を唆つて、得たりとする。その思ひやりのなき加減は、殆んと、團子賣り以上である。であるから、孔子は、然うした手會を貶して、
許いて直を爲す者を惡む。
といつてゐる。
孔子の道、要は、仁の一字に在る。仁は、心の全德である。一言、以て、仁の

何たるやを蔽ふわけには行かないが、差し當り、恕、卽はち、思ひやりの義と見て、大差はあるまい。人、若し、思ひやりの一事に於て、得る者があるならば、蓋し、仁者たるに幾いであらう。

八の一五　西郷南洲の事動門

◇幾たびか辛酸を經て、志、始めて堅し。「西郷南洲」

「道を行ふ者は、固より、困厄に逢ふものなれば、如何なる艱難の地に立つとも、事の成否、身の死生などに、少しも關係せぬものなり。事に、上手、下手あり、物に、出來る人、出來ざる人あるより、自然、心を動かす人もあれども、人は、道を行ふもの故、道を蹈むに、上手、下手もなく、出來ざる人もなし。故に、只管、道を行ひ、道を樂み。若し、艱難に逢ふて、之を凌がんとならば、彌、道を行ひ、道を樂むべし。予は、壯年より、艱難といふ艱難に罹りし故、今は、どんな事に出會ふとも、動搖は致すまじ。夫だけは仕合なり。「西郷南洲」

×　×　×

維新の際、南洲は、常人の堪ふべからざる勞苦に堪へて、國事に奔走した。而も、その勞苦は、覺悟の上の勞苦であつた。「道を行ふ者は、固より、困厄に逢ふもの」との覺悟を以て、勞苦の事に從つた。これ、その、能く、勞苦に堪え得た所以で、中庸に、

事、前に定まれば、困しまず。

といふもの、これであるが、覺悟だけでは、まだ足らぬ。一旦の覺悟は、以て勞苦に堪へるに足らぬ。

「只管、道を行ひ、道を樂み、若し、艱難に逢ふて、之を凌がんとならば、彌々道を行ひ、道を樂むべし。」——これ、聖人の心である。南洲は、何によつて、斯くの如きを得たか。

「予は、壯年より、艱難といふ艱難に罹りし故、今は、どんな事に出會ふとも、動搖は致すまじ。」——これである。此れがあつたればこそ、彼れがあつたのであ

る。壯年以來、久しく、勞苦に馴れてゐればこそ、勞苦を勞苦とせずして、勞苦の中にも、道を行ひ、道を樂しむを得たのである。覺悟だけでは、足るものではない。寧ろ、勞苦に馴れた者のみが、勞苦に對して、毅然たる覺悟を懷くことが出來る。

尼子十勇士の隨一なる、山中鹿之助は、毎月、三日月を拜しては、

『何卒、私に艱難をお下し下されよ。』と祈り、且つ、

憂き事の、なほこの上に、積れかし。限りある身の、力ためさん。

の歌を詠んだ。亦た、勞苦を習ひ、事に堪へることを習はんとしたのである。特に、艱難を祈つた如き、その志の、如何に切であつたかを想ふに足る。

因つて思ふに、貧困の人は、幸福である。彼れは、祈らずして、艱難を得てゐる。これ勞苦を習ふに適當な機會を與へられてゐるのである。普通の人情からすれば、彼れは、不幸な人である。識者は、却つて、以て、幸福な人とする。

艱難に優る教育はない。「ビー、コンズフヰルド」

といひしもの、識者の定論に近い。

但し、艱難を厭ふ者には、艱難も、教育にはならぬ。勞苦を忌む者には、勞苦も、勞苦を習ふの機會にはならぬ。

小人、窮すれば、こゝに濫す。「孔子」

貧するや、飽する。「日本俚諺」

といふことになつて、それは、却つて、墮落の因である。思はなければならぬ。

八の一六　大陽寺左平次誇らず

◇勤めても、勤めても又た、勤めても、勤め足らぬは、勤めなりけり。「古歌」

太陽寺左平次は、長湫の役に、池田勝入齊の手について、戰功があつた。その後ち、天下は、泰平となり、大坂籠城の者さへ、諸侯の國に仕へることを許されたので、嘗つて、戰功のあつた者は、それをいひ立てゝ、仕へを求めた。けれど、左平次は、

『大將敗亡の上は、その手についた者として、自分の戰功をいふのは、心得方が違つてゐる。』といつて、一生、長湫での事を語らなかつた。

× × × ×

世間、皆誇る。善に誇り、功に誇り、學問に誇り、才智に誇り、文章に誇り、筆蹟に誇り、技藝に誇り、門閥に誇り、

『俺は、昨日、蕎麥を七つ食つたよ。』

『汁粉の十五とは何うだらう？』と、下らない事にも誇る。若し、

『俺は誇らないよ。』といふ者があるならば、その人、內心、或ひは誇らないことに誇つてゐるかも知れぬ。

誇るのは、自分を充分とするのである。微々たる人間の「充分」が、果して、何程の充分だらう？　善に誇り、功に誇るのは、是も、誇り榮えのある誇り方かも知れぬが、その善、何程の善だらう？　その功、何程の功だらう？

眞の善人は、善と知らずして、善を行ふ。眞の功臣は、功と知らずして、功を立てる。善と知る所の善には、限りがある。これを行ふ者に、最早充分との心持

ちが出來て、つひ、誇りたくなる。誇るに至つて、善は、それ限り、止んでしまふ。功と知る所の功にも、同斷の失がある。

眞の善人も、或ひは、善を善と知らう。眞の功臣も、或ひは、功を功と知らう。知り方が違ふ。己れの善の行ひ足りないこと、己れの功の立て足りないことをこそ知れ、充分とは知らない。「勤めても、又た勤めても、勤めても、勤め足らぬは勤めなりけり。」と嘆じて、益す、善を行ふことに努め、益す、功を立てることに力める。けれど、善に誇り、功に誇るなどの心は、毛頭だもない。

であるから、老子には、

功成りて居らず。

の語があり、莊子は、

神人は、功なし。

の語があつた。善を愛し、功を思ふ者の、應に、三思すべき所である。

左平次の言は、道理至極である。主人の家が亡びたには、臣たる者も、責任の一部を分たなければならぬ。その罪は、前日の功を帳消しにして餘りがある。こ

れを思はず、微功に誇り、これを賣りものにして、祿を求めるなどは、以ての外である。

八の一七　日蓮信仰の力

◇我等をして、世に勝たしむるものは、我等の信なり。「ヨハネ」

日蓮に對する他宗の憎怨、幕府の嫌忌は、その極に達した。文永八年九月十二日、平賴綱を主將とする三百餘人の兵は、どつと、鎌倉松葉ケ谷の草庵へと押し寄せた。

『如何に日蓮、上を恐れぬ汝の言動、最早容赦は相成らぬ。我れ、今、汝を成敗してくれる。上命であるぞ、疾く疾く出でて、尋常に繩にかゝれ。』馬上に呼ばる賴綱の大音聲には、草庵の柱も搖がんとした。

折柄、法弟、檀越を相手に、法華經の玄理を說きつゝあつた日蓮は、そのた〻

事ならぬを知つて、釋迦像、法華經の二品を懷中し、椽先へ立つて出た。

賴綱は、憎さげに一瞥して、

『者共、あれ、召し捕れッ！』と下知した。兵等は、日蓮を引き摺り下した。

日蓮は、きつと、賴綱を見上げて、無道の成敗を責めた。賴綱は、怒氣滿面、

『ほざくな！　と大喝した。兵等は、日蓮の懷ろから、法華經を取つて、日蓮を打つた。法華經は、風なきに、落花と散つた。兵等は、手取り、足取り、日蓮を馬上に舁ぎ載せ、當時の刑場龍の口へと引つ立てた。

斯くて、途中、鶴ケ岡八幡の祠前へ來ると、日蓮は、ひらり馬を飛び下り、人〻の驚く中に突つ立つて、神殿を仰ぎつゝ、

『八幡大菩薩に物申す。如何に、大菩薩は、眞の神に在すか、在さぬか、釋尊が靈山にての御說法には、十方の佛、菩薩、無量の諸王、三國の善神を擧つて、法華經の行者を保護すべき旨、固く誓はせられてある。今、この日蓮こそは、日本第一の法華經の行者ではござらぬか。身に一分の罪なくして、首を刎ねられに行くものを、大菩薩は、何とか糊はす？　眞の神に在すなら、何とて、こゝへはお

出逢ひなさらぬ？　日蓮、若し、首を刎ねられなば、この由、釋尊へ訴へにやならぬ。それを恐ろしとならば、疼く、奇持の現證を顯はし給へ。』といひ終つて、再び、馬に上つた。聞く者は、

『てもさても、大膽な者ではある。』と、舌を卷いて驚いた。

夜に入つて。龍の口へ着いた。日蓮は、首の座に直つた。疾風が雨を捲いて到つた、怪しの光が、唸りを生じて飛んだ、劍手依智三郎の揮り冠つた名劍蛇胴丸は、ぽつきと音して、三段に折れた。幕府は、日蓮の死を赦して、改めて、佐渡へ流すことにした。

× × ×

末段、怪しの光が、唸りを生じて飛んだの、劍手の刀が、三段に折れたのといふ話は、信ずべき限りでない。吾等は、たゞ、日蓮の奮闘ぶりに驚く。否、信仰の力に驚く。

信は「まかす」と訓む。己れを擧げて、信ずる所に任せ切り、死生、一に、その命の儘にするといふもの、これ、信仰である。彼れの眼中、信ずる所があつて

自分はない。彼れの心持ちは、無我である。神を信ずる者は、神に己れを任せて、無我である。佛を信ずる者は、佛に己れを任せて無我である。

世に、無我程、強いものはない。孟子曰く、

富貴も、淫する能はず、貧賤も、移す能はず、勇武も、屈する能はざる、これを、これ、大丈夫といふ。

と。大丈夫は、男兒の本領であつて、而も、無我の人の事である。然り、而して、無我の力は、やがて、信仰の力である。

無我の弊は、動もすれば、その人をして、無爲に終らしむるに在る。無我はよい。道を信じて、無我なる者は、道の爲めに命をも捨てる。神を信じて、無我なる者は、神の爲めに、十字架にも上る。佛を信じて、無我な者は、佛の爲めに、昇鑊をも辭せぬ。何等、信ずる所がなければ、何等、力を致すべきものもなく、結局、無爲に終るの外はない。

今、日蓮は、佛を信じた、法華經を信じた。

一身を以て、法華經を捧げ、法華經に於て、無我であつた。これ、その、能く「安

房の旋陀羅の子」を以てして、鎌倉幕府に抗し、執權北條氏に抗し、他宗の道俗に抗し、白刃に抗し、遠離に抗し、あらゆる苦難に抗して、臆せず、怯まず、奮鬪することの出來た所以である。

人間は、弱いものである。弱い人が、日蓮の如くに強くなるのは、信仰の爲めである。人間、信仰がなくてはならぬ。

知らず、今の世の俗人輩は、何を信じ、何の爲めに死せんとするか。名の爲めか、利の爲めか。酒の爲めか、女の爲めか。

八の一八　べつかつ孝

◇僞善は、惡人の免れ難い負擔である。「ジョンソン」

孝子父子は、永の病氣。元來、貧しい身の上とて、既に、餓死にも及ばうとした時、或る日、隣りの鷄が、土の塊りを咥へて來た。碎いて見ると、金貨や銀貨

が入つてゐる。これは不思議と、驚いてゐると、その翌日も、又たその翌日も、毎日、金を運ぶ。父子は、その金で藥を買ひ、病氣が癒ると、殘金を資本に商賣して、遂には、非常な大商人になつた。

この話に感心した不孝者、早速、鷄を二三十羽も飼つて、

『阿母あ、俺も、今日から、孝行をするよ。肩を揉んでやらう。何、肩は凝らないつて？　何でもいゝから、脊中を出すんだ。肌をお脱ぎよ。寒い？　我慢するさ。何、痛いつて？　然うさ、俺は、力があるから、少しは痛いよ。』

と、親を叱りながら、肩を揉む。そして、鷄が裏へ行くと、酒を飲んで、寢そべつてゐる。

こんなことを十日も續けると、或る日、鷄が、大きな土の塊りを咥へて來た。

『やれ、嬉しや！』と碎いて見ると、中から出たのは、太い蚯蚓！

『えゝ、何程、不景氣な世の中でも、この態は何だ。』と怒ると、鷄、大きな口を開いて、

『べつかつこう！』

× × ×

金が欲しさのべつかう孝、報酬目あての善行に、何の驗しがあるものか。

然し、世人の善なるもの、大概、これではあるまいか。必らずして、物質的の報酬を望まない迄も、賞められたい、あり難がられたいの慾が、つき纏ふ。所謂る、商人の善である、品物をやる代りに、金を取る。善を施す代りに、名譽を取り、感謝を取る。どこが違ふか。

これに就いては、尙ほ、大に說く所があるであらう。

八の一九　親鸞の他力信心

◇善人、なほもて、往生を遂ぐ。いはんや、悪人をや。「親鸞上人」

「彌陀の誓願、不思議に救けられまゐらせて、往生をば遂ぐるなり、と信じて、」

念佛申さんとおもひたつ心のおこるとき、すなはち、攝取不捨の利益に預けしめたまふなり。彌陀の本願には、老少、善悪の人をえらばず、たゞ、信心を要とするべし。

そのゆゑは、罪悪、深重、煩惱、熾盛の衆生を救けんがための願にてましますしかれば、本願を信ぜんには、他の善も、要にあらず。念佛にまさるべき善なきゆゑに、悪をもおそるべからず。彌陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆゑに、と云々。」（歎異鈔）

× × ×

「本願を信せんには、他の善も、要にあらず。」といひ、「悪をもおそるべからず。」といふ。何たる大斷言であらう？　何たる大信心であらう？　而も、この間、別に存する所の、無我の眞意があるのである。

世人、皆、善の爲すべく、悪の爲すべからざることを知つてゐる。單に、知るといふのみではない。人心の墮落、その極に達せんとして、人々、我利を事とし、貧、鈍、痴三毒の赴く所に一任して、平然たるの觀ある今の世にも、自ら、篤志

の人があつて、偏へに、その身、その心を、道徳的に訓練し、自家の道徳的人格を造り上げるべく、發憤、努力しつゝ在るのは、蔽ふべからざる事實で、甚はだ、人意を強くするに足るが、興へてこれを解するならは、世間、一人として、善に心を寄せてゐない者はない。

が、それ等の人は、果して、その期する所を得てゐるも。善を求めて、却つて、惡を得てはゐぬか。

世間を見渡し、自ら省みて、世界のどこに、眞の道徳があらう？　眞の善があらう？　眞の善は、眞實無妄の誠でなければならぬ。若しくは、誠の發露でなければならぬ。名譽の爲めではない。利害の爲めではない。べつかつ孝の類ではないは勿論、その行ふ所が、善であるか、惡であるかの判斷さへもなくて、例へば慈母のその子に於ける、孝子のその親に於ける、忠臣のその君に於ける、志士のその國に於ける、仁人のその同胞に於けるが如くに、一片の國情、己むに己まれずして、外、道德的行爲となるもの、これが、誠である。眞の善は。これでなければならぬ。昔は措く。少くも今の世に、斯うした善があるであらうか。

吾等の見る所、世人の善は、餘りに、贋せものである。餘りに、僞善である。べつかつ孝と大差がない。

といふのが、世人の善には、大抵、報酬の念が、つき纏ふ。人に一善を施すにも、『あの男も、大分、困つてるやうだ。今、これだけの事をして置けば、他日、俺の困つた時に默つてもゐないだはう。

情けは、人の爲めらず。

だ。』と思ふ。

放うつて置いたぢや、薄情者と譏られやう。と思ふ。

『俺をあり難く思ふだらう。』と思ふ。

『俺を尊敬するやうになるだらう。將來、いふことを聞かせるのに都合がいゝ。』と思ふ。大々的に讓歩しても、感謝されなければ承知しないで、恩知らずの、無理知らずのと、眞つ赤になつて立腹する。

村の學校への寄附金には、村會の決議による感謝狀か必要である。鎭守へ奉納の石の鳥居には、「奉納、慾野深藏」の字を刻む。利害の打算がなければ、名聞の

慾がある。要するに、報酬の念がつき纏ふ。

廣い世の中、隱德を施す者もないではない。それ等の人も、その際、

『俺は、善い事をした。』との感あるを免れない。この感、取りも直さず、「恩に被せたい」感、一種の報酬感と見るべきで、眞實無妄、「己むを得ざるに出づる」底の誠の理想に照し合する時、決して、眞の善ではない。淺猿しいものは、人の心である。

人の心は、淺猿しいものである。我々凡人は、善を行ふに堪へないものである事實が明かに證明してゐる。

であるが、寧ろ、善の、惡のといふ考へを、一切、棄てゝしまつた方がよい。善人にならうなどいふ、柄にない野心は、さらり、品川の海へでも流してしまつて、直ちに、無我の人になる——これが、最上の策である。無我、以て、人我の別を撤し去り、無慾、以て、名利の念を取り捨てる時、初めて、眞の善がある。眞の善は、無我の人のものである。誠は、無我の人のものである。

親鸞の語は、殆んど、人を驚かすに足る。これも歎異鈔の一句に、「善人、なほ

もて、往生を遂ぐ。況んや、惡人をや。」といふのがある。これなどは、甚はだしい。卒かに聞けば、惡事を奬勵し、道德を無視した言とも見られ、物騷千萬な語であるが、親鸞の意は、他に在る。淺猿しい人間、自力を以てして、善を行ふこと、思ひも寄らぬ。寧ろ、善惡を外にして、佛智を信じ、彌陀の他力に依るに如かぬ。すれば、自然、眞の善を行ふことも出來やう、といふのが、親鸞の眞意の在る所であらう。

彌陀を信ずるのは、彌陀にこの身を託するのである。卽はち、無我になるのである。親鸞の絕對他力の信心は、絕對無我を意味するのでなければならぬ。

佛法には無我、と仰せられた。ゆめ〳〵、我れといふことあるまじく。

又は、

自力作善の人は、偏へに他力をたのむ心、缺けたる間、彌陀の本願にあらず。

などの語、以て、親鸞の眞意を彷彿するに足るであらう。

這般の思想は、獨り、親鸞のものではない。これ、佛敎を通じての見方で、禪の如き、最も然りである。

不思善、不思惡。

（善を思はず、惡を思はず。）

は、禪家の常套語である。證道歌には、

頓覺了如來禪、六度萬行體中圓。

（頓に、如來禪を覺了すれば、六度萬行、體中に圓かなり。）

と見えてゐる。たゞ、無我を得ればよい。萬行、萬善、皆、これに隨ふ、といふもの、禪の要である。

善の貴いことに論はない。道德、固より、重んじなければならぬ。これを貴び、これを重んずるの故に、精神を修養して、人らしき人となる——これ、人間の成し得る最大の事業である。但た、所謂る精神の修養が、上滑りの修養であつてはならぬ。善惡二途の間に拘々たるが如くは、

心の欲する所に從つて、難を踰えず。「孔子」

の縱橫自在は、望まるべくもない。宜しく、無我の一道に着目して、精細に工夫し、勇猛に精進すべきである。

一生涯、心の儘に遊び歩き、曾つて、身の貧乏を知らなかつたが、安永九年、八十歳で死んだ。病中の歌に、

きのふには、變るとなしに、身にぞしむ。荻に音なふ、秋の夕風。

× × ×

恬淡無欲、この人、正に、高士傳中の人である。足を空にみて、名利の途に狂奔してゐる俗人に比べては、高きこと、千萬里のみではないが、我々の修養は、たゞこの程度に止まつてはならぬ。更に、一段の高處に出て、世の爲め、人の爲め、大に盡す所がなくてはならぬ。自分は、自分の自分であると同時に、又た、他人の自分である。苟くも、一息の存する限り、我々は、國家、社會に對して、負ふ所の義務である。

孔子の仁、釋迦の慈悲、基督の愛——我々の理想は、宜しく、これ等に在るべきである。

八の二〇　森金吾の貧生涯

◇松風、拂ひ盡す、利名の塵。「西鄕南洲」

森金吾は、阿波の國小鳴戸の人である、少壯、既に、隱遁の志が深かつたけれど、何か、事情があつたと見えて、京都の官家に仕へること多年四十近くで、漸く、その志を遂げ、辭して故鄕へ歸ると、膝を容れるだけの小庵を結び、粧粧瓶一つ持たず、

『飯なぞ炊くのは、面倒ぢや。』といつて、朝夕、蕎麥の粉で飢ゑを凌いだ。

稀れに、德島の城下へ行くと、知る、知らぬ人、敬ひ優遇して、金吾の好きな酒を進めた。

年を老つても、健康な人で、七十幾つの時、大和吉野の金峰山へ登つた。

『昔から、こんな老人の登山は、例しがない。』とかで、山坊の記錄にも留つた。

八の二一　河村隨軒薪を惜しむ

◇古人は、儉を以て美德と爲せり。「司馬溫公」

河村隨軒は、江戸の大火に、材木を賣つて、巨富を致し、後ち、大阪の安治川を開くなど、種々の公益事業あり、その膽、その識、素より、尋常の商人ではなかつた。

隨軒、或る日、廚へ行つて、竈に燃してある薪の、多過ぎるのを見ると、その一二本を拔き去り、下女が、

『旦那樣は、大家の御主人で、それに、大氣な方だと、世間で申してをります。僅か一二本の薪をお惜しみなさるのは、合點が參りません。』と、無遠慮に譏ると、

『お前は、場合を知らぬのぢや。』と一笑し、

『俺は、富士山の頂上へ登つては、足下に見える大海の魚を、全部、漁り盡す

やうなことを考へる。米や麥を作つて、それを食ふとなると、一粒でも失ふまいと思ふ。今、竈に向つて薪を惜しむのも、同じ道理ぢやないか。』といつたとか。

× × ×

昔、司馬温公は、

古人は、儉を以て、美德と爲し、今人は、儉を以て、相訴病す。あゝ、異なるかな。

と痛嘆した。文明の進歩、富の增加に連れて、人々、節儉の美德を失ふのは、已むを得ないことかも知れぬ。

「儉を以て、相訴病」し偶ま、一紙、半錢の費をも、惜しむで、無駄にしない者を見て、けちとして譏り、吝嗇として嗤ふに至つては、不心得も甚だしい、畢竟、節儉と吝嗇とを混同してゐるのであらう。吝嗇は、不德であるが節儉は、美德である。

抑も、何の理由があつて、節儉を嗤ふか、儉約を譏るか。然らば、無駄使ひが、善い事だらうか。一紙半錢を微物としてこれを無駄に費やすことに依つて、何の

利益があるか。誰れが、利益を蒙むるか。幸福を受けるものが、一人でもあるか世の浪費者なる者に、自分も、他人も、誰れ一人、喜ばない事の爲めに、金品を費やしてゐるのである。

喜ぶ者はないが、泣く者がある、一紙、半錢を無駄にする心は、やがて、千金、百金を無駄にする心である。果ては、先祖の遺產を女に拋ち、家屋敷を飲みなくする心である。その身の零落は、自業自得、已むを得ないとしても、親、兄弟の不幸を何とする？　妻や子供の泣き顏を何とする？

こゝに至つて、無駄使ひは、罪惡である。家族に對して、恐るべき罪惡を犯すのである。一身の不注意、見榮張り、嗜慾の爲めに、親、兄弟との義務を缺き、妻子を泣かせて顧みないとは、殆んど、禽獸の心である。殘酷に過ぎる。利己に過ぎる。

まこと、平生、無駄使ひを事とする者には、利己主義者が多い。大切な親を忘れ、可愛い我が子にさい殘酷な彼等である。他人に同情がないのは、已むを得ぬ。青樓に遊んで、賣春婦の膝に、百金を投ずることは惜しまないが、鰥寡孤獨、飢

えに泣く同胞に、一文を吝しむ者は、彼等である。彼等の金は、彼等自身の口臓の爲めには費されるが、不幸な兄弟の爲めには費されない。嗜慾には使はれるが、善事には用ひられない。利己主義でなくて、何であらう？　以て、彼等を詰るならば、彼等は、いふであらう、

『女や酒に費るので、他人に迄ぶは、手が廻らない。』と。然ればこそ、利己主義である。

無駄使ひの害は、斯くの如くに甚だしい。浪費者を以て、節儉家を譏るのは、所謂る、身知らずなるものである。浪費の不徳たるは、吝嗇よりも甚はだしい。浪費者は、家族を泣かせる。吝嗇漢、吝嗇ではあるが、家族を泣かせる迄には至らない。

吝嗇、不可、浪費、最も不可、獨り、節儉のみが、美徳である。以て、一身、一家の安穩を保つに足り、以て、同胞、他人に仁惠を施すに足る。孔子曰く、

用を節して、人を愛す。

と、用を節すればこそ――節儉を勤むればこそ、人を愛し、人を惠むことも出

來るのである。

若し、それ節儉を勤めて、人を惠むことを知らず、たゞ、封殖、自ら喜ぶに止まる者の如きは、いふに足らぬ。その不徳たるは、吝嗇、浪費と、五十歩、百歩の間に在るのである。今の所謂る節儉家なるものは、大部分が、これらしい。これ、亦た、嘆ぜざるを得ぬ。

八の二三　百萬長者を望む男

◇一善、微なりと雖も、日に養うて、害せざれば、遂に、其徳を成す。「伊藤東涯」

或る男、金持ちが、何百萬、何千萬といふ財産を貯へて、立派な家に棲み、毎日、贅澤に暮してゐるのを見ると、羨ましくて堪らない。

『自分も、何卒、彼あした金持ちになりたいものだ。』と、こゝに憤りを發して、爾來、夜の目も寢ずに稼いだ結果、二三百の金は出來たが、百萬長者は、思ひ

もよらない。

『金持ちになれない位ゐなら、稼いだとて、詰るものか。否、こればかりの財産、何の足しにもなりはしない。』と、家、屋敷は、人に呉れてやり、家財、諸道具を車に載せて、大河畔へ運び出し、殘らず、水中へ投げ込んでしまつた。それを見た人は、

『何故、そんなことをするのだ？　僅かの財産でもないよりは、勝しぢやないか、馬鹿な男だ。』といつて、大笑ひをした。

× × ×

小財産は、大財産に如かぬ。小善は、大善に如かぬ。大財産に如かない小財産も、無一物よりは、勝しである。大善に如かない小善も、同然、善を行はないよりは、勝しである。他人の善事を評して、

『世界は廣い。貧乏人は多い。三人、五人を救つたとて、何になるものか。善人面が、聞いて……否、見て呆れらあ。』といふ者に、百萬長者の、及びもつかない事を理由に、折角貯めた數百金を、無益に捨て去る、愚人の類である。寧ろ、

血も涙もない不仁者である。

善を行ふにも、順序がある。全世界の貧乏人、日本中の困窮者を、一度に救ふなどは、勿論、望まるべくもない。身分相應、手近い所、例へば、親類、緣者、朋友、知人、合壁、鄕黨から始めて、徐ろに、遠方、見ず知らずの他人に迄も、及ぼして行くのが、善を行ふ順序である。昭憲皇太后の御詠にも、

國民を、救はん道も、近きより、おし及ばさん、遠きさかひに。

と仰せられてある。

又た、これが、仁者の心である。仁者の心は、物に忍びない心である。卽はち、同情である。同情は、遠方の人よりも、手近な人に對して、起り易い。耳に聞く所よりも、目に見る所に對して、切である。孟子に、

君子は、庖廚を遠ざく。

遠ざけた所で、何れは殺される牛である、鷄である。たゞ、その死を見、その聲を聞くに忍びないが爲めに、我が耳自の及ばない場所へ、庖廚を移すので、これが、仁者の心である。朝夕相見る手近の人の困窮に忍びず、これに善を施すの

が、即はち、仁者の心である。若し、近きを措いて顧みず、いぎなり、遠きに就かうとする者があるならば、その人、決して、仁者ではない。その善は、恐らく、名聞の心に出て、到底、僞善でなければならぬ。

それは、手近の人である。救ふ所は、三五人に過ぎぬ。所謂る、小善なるものであるが、小を積んで、大に至るのに、善も、亦た、同斷である。手近の三五人に始めて、遠方の三五十人に及ぼすのは、難事ではない。志次第、救濟の手を全天下に擴げることも出來る。伊藤東涯は、「一善、微なりと雖も、日に養うて害せざれば、遂に、その德を成す。」といつた。蜀漢の劉備は、後主の爲めに、

惡、小なるを以て、これを爲すこと勿れ。善、小なるを以て、これを爲さゞること勿れ。

といつた。小善、勤めなければならぬ。小財産の大財産に及ばないが爲めに、無一物を撰ぶ者は、その人、愚人である、小善の大善に及ばないことを理由に、一善をも施さず、手近に泣く困窮者、親類、知人の不幸を坐視して顧みない者は、その人、決して、仁者ではない。

八の二三　勉學にてもよし

◇朝に道を聞いて、夕に死すとも可なり。「孔子」

「凡そ、人の學問するに、少年の時は、憂ふて打ち過ぎ、中年に及びて、學びんことを思ひ、或は、老境に臨みで、始めて、舊年の非を知りて、學びんとするに志あるものもあり。然るに、今よりしては、成り難きことに思ふて、其の志を廢するあり。是れ等は、深切に志の立たざる人と云ふべし。晉の皇謐は、二十年にて、始めて、書を讀み、高適は、五十歳にて、始めて、詩を作ることを學べり。宋の蘇老泉は、二十七歳にて、始めて、書を讀み、文章を學べり、明の李千鱗は、詩文に名を得たる者なれども、中年の頃には、詩に甚だ拙く、人の爲めに笑はれぬれど、晩年に至りて、巧になりぬる由、劉氏鴻書に見えたり。この外、古人にて、晩學にて達するもの多し。只、學は、其の志の憤起するによりて、

力到ることにて、早晩にはよらぬなり。たとひ、少年より學ぶとも、悠々たる心にて、困勉苦思せざれば、いつも、不眞面目にて、進まぬことなり。たとひ、晩學にて、大に進むことを得ずとても、少しき得ることあらば、世の碌々たる人の、醉生夢死するには勝らざらんや。」(中村蘭林)

× × ×

教育が進んで、道德が退く、學問が發達して、人間が腐る——日本今日の狀はこれではあるまいか。畢竟、今の教育が惡い、學問が惡い。

昔の教育は、人を造る爲めの教育であつた。今の教育は、小才子を造る爲めの教育である。昔の學問は、道を知る爲めの學問であつた。今の學問は、職業的知識を得る爲めの學問である。

少くも、今の教育は、人を造ることを忘れてゐる。今日の學問は道を度外に措いてゐる。これでは、何とも仕方があるまい。

道を度外に措いて、單に、職業的知識を得ることを目的とする學問ならば、人が學問する時期は、專ら、少年、青年の頃に在るであらう。晩學は、無益である。

中年、老年に及んで、職業的知識を得た所で、これを用ひるに餘日がないけれど、道を知る爲めにする學問ならば、學問に、遲いといふ時はない。晩學結構、五十、六十は愚か、明日は死ぬといふ前の日にも、「子曰く」を始むべきである。

であるから、孔子の語は、「朝に道を聞いで、夕に死すとも可なり。」とあり、伊藤仁齋は、この語に就いて、

これ、老衰に託し、或ひは、微恙に罹りて、在つて、學を爲さゞる者の爲めに發す。それ、道は、人の人だる所以の道なり。人と爲りて、これを聞かざれば、皆虛しく生くるのみ。雞犬と伍を共にするに非ざれば、草木と與に、同じく朽ちんとす。悲しまざるべけんや。苟くも、一旦、これを聞くことを得ば、人たる所以を得て終へん。故に、君子の死を終ふといふ。その漸滅せざるをいふなり。或ひは曰く。朝に聞いて、夕に死す。亦た、太だ急ならずやと。曰く、然らず。人として、道を聞かざれば、生くと雖も、益なし。故に、夫子、朝に聞いて、夕に死するを以て、可とするものは、最も、その、道を聞かざるべからざるの甚だしきを要すなり。何ぞ、太だ、急なりといはん。

と論じてゐる。まことに然りである。

世には、徒らに老いてゐる者が多い。生來、曾つて、道を學ばず、曾つて、他人の忠告に耳を傾けずして、四十、五十の年齢に達し、少しばかり、金でも出來ると、もう一廉の紳士になつた心組である。

學問が、何になる？　俺なんか、小學校を終つた限り、一冊の本も讀まないけれど、立派に、世の中を渡つて行く。經驗を積んでるからね。』などといふ。けれど、學問の伴はない經驗が、何にならうか？　人、學ばない者の經驗は、積めば積む程、人間を惡くする。世辭に老ける。人を欺すことが上手になる。面の皮が厚くなる。そんな經驗が、何にならう。古歌に、

若き時、學ばぬ悔を、嚙み締むる、奥齒なきまで、身は老いにけり。

とあるが、學問の味ひ、道の旨さは、齒がなくても、嚙み締められる。宜しく、氣のついた時を境に、切めては、論語一部だけでも——右の仁齋が「最上至極、宇宙第一の書」と賞めてゐる論語一部だけでも讀んで、道を學ぶべきである。徒らに老いるには優らう。徒らに死んだのでは、遺憾、限りがない。

八の二四　法然上人念佛者に答ふ

◇無爲の事に處る。「老子」

或る人が、法然上人に向つて、

『お念佛の時、睡氣を催して來て、つひ、行を怠りまする。如何致しましたらば、この障りが除れませうか。』と尋ねると、上人は、

『目の覺めてゐる間、念佛せられよ。』と訓へた。

× × ×

無我、無心、以て、自然任せに生活するのは、最も安全な、最も樂な、最も暢氣な、最も危なげのない處世法である。貴きも、自然任せ、貧賤も、自然任せ。夷狄も、自然任せ、艱難も、自然任せ、一切、自然に打ち任せて、我れを用ひず、無理をせず、水の流るゝが儘に流るゝ如くに世を渡れば、こんな大安心なことは

ない。

が、この事、小人には難かしい。小人は、左右、我れを用ひたがる。私智、私案、以て、無理をする。無理は、通らない。自然に逆らふのが、無理である。通らないわけである。通らなければ、不平となり、不滿となり、煩悶となり、苦痛となり、泣きの涙で日を送るとなる。小人は、大概、これである。

老子に、「無爲の事に處る。」の一句がある。無爲といつて、何もしないでゐるのである。手を束ねて、棚から落ちる牡丹餅を待つのではない。

牡丹餅、棚にあり。「日本俚諺」

といふけれど、上げて、初めて、棚にあるのである。上げはする。人力の及ぶ限りは、思ひを竭し、手を盡す。けれど、事、決して、人力のみで成るものではない。

耕すも、餒、その中に在り。「論語」

で、五風、十雨の時を失へば、粒々辛苦も、水の泡になる。それは、天命である。自然である。人力の及ばない所である。何とも致し方がない。致し方のない

ことは、致し方がないとして、その天命に安んずる。泣かず、笑はず、藻掻かずに、自然の成行を甘受する。

『米が獲れない。これでは困る。どこかへ盜みにでも出掛やうか。』などいふ、無理な考へを起さない。これが、卽はち、「無爲の事に處る」のである。蓋し、處世の第一法であらう。

人は、すべての場合に於て、「無爲の事に處る」のでなければならぬ。自然に任せるのでなければならぬ。佛敎徒として、念佛を唱へるのは、結構である。その結構な事にも、無理を通さうとかゝつてはならぬ。睡くなつたら、寢るかよい夜も寢ないで、念佛を唱へるなどは、出來得べくもない。それは、無理といふものである。

『あゝ、こんなことでは、極樂往生も覺束ない。地獄行きが必定だ。これは困つた、これは困つた。』と、心を苦しめるのは、自然に逆ふのである。天命に背くのである。他力本願の旨義にも違ふ。法然曰く、「目が覺めたら、念佛せられよ。」と

これでよい。

借りた金は、返さなければならぬ。百方、手を盡して、返す手段がなければ、延期を乞ふの外はない。

『それでは、先方へ相濟まぬから……』と、善からぬ方策を講ずるのは、無理である。自然に反する。

親孝行は、甚はだよい。昔、病氣の母に食べさせたい一心から、他人の畠で梨を盗み、捉かまつた孝女があつた。その情は、憐れむべしであるが、無理たるを免れない。

無理は通らぬ。萬事、天命に從ひ、自然に任せる中にも、安全の道はある。中庸に、

富きに素しては、富きに行ふ。貧賤に素しては、貧賤に行ふ。夷狄に素しては、夷狄に行ふ。患難に素しては。患難に行ふ。君子、入るとして、自得せざるなし。

とあるのも、自然に任するの義である。論語に、

意なく、必なく。固なく、我なし。

適もなく、莫もなし、

可もなく、不可もなし。

などあるのも、同樣の意味に解してよい。天命に從ひ、自然に任ずる——これが、聖賢の心である。

這般の心は、無我から來る。無我、以て、私心を用ひず、無心、以て、私智を使はなければ、自然に任するの外はない。

八の二五　畫家百谷の妻

◇家貧しうして、良妻を思ひ、國亂れて、良相を思ふ。「史記」

畫家小田百谷、字は巨海、一に、海僊と號した。長門の人である。初め、京都へ出て、吳月溪に學んだが、その畫風に慊らず、深く、唐畫を喜んで、遂に、長崎遊學を思ひ立つた。けれど、家に一文の貯へもなく、殊には妻を持つ身の、何

とも仕方がない。
『自分一人なら、左も右もならうけれど……』
と思ひ煩ふにつけ、毎夜、夢に迄見て、
『あゝ、殘念な！』口惜しげに、囈語をいふことさへあつた。
妻は、不思議に思つて、
『時々、妙な囈語を仰しやる。何が、殘念ですか。』と問うた。百谷は、仔細を話した。妻は、
『それ程にお思ひなさる事を、妾故に、仕遂げられないとあつては、成程、殘念でせう。妾としても、心苦しう思ひます、何卒、長崎へお出でなさいまし。妾は何んなにでも辛抱して、良人の成業を樂みに、待つてをりますから、と勸めた。百谷は、雄々しい妻の言葉に力を得て、
『では、賴むよ。』とばかり、用意もそこそこに、長崎へ行つた。
斯くて、百谷は、留學數年、明人吳春に從つて、その業を卒へ、京都へ歸つた妻の喜びそれは、いふ迄もない。やがて、手函から三十兩の金を取り出して、百

谷の前に置き、
『お歸りになれば、家をお興しなさるのに、相當、費用のかゝることと思ひまして、留守中、精々、賃仕事などをして、これだけの金を貯へました。心置きなくお使ひ下さいまし。』といつた、百谷は、泣いてその志を喜んだ。
百谷が、貧困の間に業を成して、一代の巨匠となり、名を天下に轟かすに至つたのは、大部分、妻の內助によるといふ。

× × ×

總べての妻の、その夫に對する第一の注文は、「平凡なれ。」といふに在る。精々家業に勉强して、精々、金を儲けてくれる。流行に後れないだけの服裝、人中へ出て恥づかしくないだけの頭の物、足の物を新調してくれる。時々は、芝居へもやつてくれる、といふ位るの所で、夫に、高い理想があるとか、大きな目的があるとかいふやうなことは、それが、直接、金儲けの種にならない限り、妻に取つての大禁物である。
沈香も焚かず、屁も放らず。「日本俚諺」

たゞたゞ、家業と首引きしてゐてくれゝばよい。要するに、平凡なれ――これが、夫に對する、多くの妻の注文である。

この妻をして、百谷のやうな夫に仕へしめよ、

『僕は、自分の繪に慊りない。長崎へ行つて、唐畫を學びたいと思ふんだが……』

『この家は、何うするんでせう？』

『不在中、お前が、やつて行くのさ。』

『困りますねえ、金もなしに……然し、唐畫なら、ずつと、値好く賣れるんでせう？』

『否、それは、判らん。僕は、たゞ、好きで唐畫を學ぶんだからね。』

『それなら、止して下さい。今の繪だつて、も少し、勉强なされば、樂に、食つて行かれます。三文にもならない事に、苦勞なさるのは、貴方も、詰らない。妾も、詰らない。强つて、長崎へいらつしやるなら、お暇を下さい。他に、夫を目つけますから。』――こんな談判を始めるだらう。百谷の志を挫かせ、平凡畫家

を以て、一生を終らせるであらう。內助ではない。見事、內妨の功を擧げるだらう。

それにしても、百谷の妻は、偉かつた。女の手一つで、貧乏世帶を張り通すこの數年、夫をして、能く、その志を成さしめたさへあるに、手內職に依つて、家を興す費用を貯へ、これを夫に進めた一擧には、『家貧しうして、良妻を思ひ、國亂れて、良相を思ふ。』の古語も、思ひ出でられて、何とも、敬服に堪へぬ。この人、尋常の婦人ではなかつたのである。

八の二六　鴛鴦の眞似

◇六日の菖蒲、十日の菊。「日本俚諺」

昔し、印度の或る地方では、祭禮に、蓮の花で女の髪を飾る習慣があつた。自然、祭禮の前には、蓮の花一つが、五圓の、十圓のといふ、法外な値段になつた或る貧乏人の妻が、夫に向つて、

『良人、蓮の花を買つて下さいね。でなきや、妾は、この家を出て行きますよ。』と強い談判に、夫は、大きに閉口したが、不圖、氣が附くと、自分は、鴛鴦の聲を眞似ることが上手である。

『よし、鴛鴦になつて行つて、城のお濠の蓮の花を盗んで來やう。』と、太い考へを起して、夜遲く、お濠の中へ忍び入り、花を捜して　彼方此方、泳いでゐると早くも、番人に目つかつて、

『誰だッ？　何者だッ？』との聲がかゝつた。貧乏人は、面喰つてしまつて、頓には鴛鴦の聲が出ない。到頭、捕まつて、二つ三つ打たれた末に、王様の前へ引つ立てられると、

『こゝ、こゝ……』と、頻りに、鴛鴦の眞ねをやつた。王様は、

『馬鹿め！』と叱つて、

『今更、そんな聲を出したとて、追つ着くことか。それ、役人共、此奴を牢へ入れてしまへ。』

× × ×

我々愚人のする事には、左右、手遲れが多い。前にすべき事を、後にする。前に氣づくべき事を、後に氣づく。智者の智も、愚人の智も、智に變りがないが、前に出るのと、後に出るのとによつて、一は智となり、他は、愚となる。

下司の智惠は、後から出る。「日本俚諺」

とは、こゝの事。

愚人の常、定りきつた事も、存外、前には氣づかない。病氣になつてから、苦い藥を服むよりも、病氣にならない前に、養生に氣をつけた方がよい。不養生をして、病氣になるのは、定りきつた事である。

無駄に使ひ捨てた金を悔んで、急に、儉約を思ひ立つ。無駄費ひから、困窮に至るのは、定りきつた事であるのに、然りとては、氣づかな過ぎる。

月の晦日に沈む人は、花の七日に浮れる人である。浮沈は、物の理數、定りきつた事ではないか。

年の瀬の越し難きは、箱根八里の越し難く、大井川の越し難きが如くである。

分別の、顔ばかりなり、年の暮。「愚佛」

歳末の市中に見る所は、鵜の目、鷹の目、泥坊の目――その物凄さといつたらない。大晦日が、突然、やつて來るわけではなく、

今更に、何か惜しまん。神武より、二千年來、暮れて行く年。「蜀山人」

定りきつた事であるのに、一年中を、常正月の心で送り、押し詰つて、遽かに氣づく。先の見えないこと夥だしい。

借りた金を返すのは、定りきつた事である。催促の二三度もされて、初めて氣づき、初めて返す。催促されない前に返せば、信用があるものを、後へんになつて、不信用を招くとは、愚なるかな！

萬事、怠りには、悔がある。定りきつた事である。

少年は、失策の年なり。壯年は、競爭の年なり。老年は、後悔の年なり。「ビーコンスフヰールド」

老年をして、後悔の年ならしむるものは、少年、壯年の年に於ける、怠りである。而も、怠りとは、前にすべき事を、後にし、前に氣づくべき事を、後に氣づくに外ならなぬ。

斯く、定りきつた事にも、前以ては氣つかない愚人、突發事件、不意の出來事――卒ろ、突發に似、不意と見られて、その實、定りきつた事件、出來事に氣づかないのは、道理である。無常の世の中、何時、何事が起らうも知れぬ。病難、火難、水難、盜難から、地震の難、海嘯の難に及んで、世に珍らしい例ではないが、既に、無常の世とある以上、然うした災難が襲つて來るのも、定りきつた事であるが、一應、定りきらない如くに見られる所から、愚人は、尙更、氣づかない。鼻を突く迄、暢氣に構へる。火事に遇ふ迄は、火の元を組末にする、泥坊にやられる迄は、戸締りを弛めて置く。智者の愚人との異なる所は、前に氣づくと、後に氣づくとの間に在つて、智者が、前に氣づくのは、無常の世を、無常の世と知るからである。愚人が、後に氣づくのは、無常の世を、常住の世と心得るからである。

こゝに至つて、吾等は、

平生往生。「日本俚諺」

といふことを考へる。極樂往生は、平生に定まる。何事も、「平生往生」である。

平生、事に先だつて、用意があれば、何事が起らうとも、決して、驚くことはない。

用意といふ。質素に身を持ち、儉約を勤めて、金を貯へるのも、用意の一つに相違ないが、もつと大切なのは、心の用意である。金の用意よりも、心の用意が、大切である。

心の用意、如何？　平生、篤と、無常の理を諦觀して、何事、何物にも、恃みを繫けず、無我にして、天命に從ひ、無心にして、自然に任するの修養を積んでさへゐれば、死生存亡、吉凶禍福、如何なる運命に會しやうとも、一向、平氣なものである。これ、心の用意である。用意中の用意である。

中庸に曰く、

凡そ、事、豫めすれば立ち、豫めせざれは廢る。言、前に定まれば、跲づかず。事、前に定まれば、困しまづ。行、前に定まれは、疾しからず。道、前に定まれば、窮まらず。

と。捕まつてから、鴛鴦の眞似をしないやうに――「六日の菖蒲、十日の菊。」にならぬやう、定りきつた事は勿論、定りきらないげに見える事にも、左右、用意のこと！　用意のこと！

八の二七　時の信と人の信

◇民、信なくんば、立たず。「日本俚諺」

「春の德は風、風、信ならざれば、其の華、盛んならず。華、盛んならざれば、果實、生ぜず。夏の德は暑。暑、信ならざれば、其の土、肥ゑず。土、肥ゑざれば、長ずること遂に精しからず。秋の德は雨。雨、信ならざれば、其の穀、堅からず。穀、堅からざれば、五種、成らず。冬の德は寒。寒、信ならざれば、其の地、剛からず。地、剛からざれば、凍閉して開けず。天地の大、四時の化にして猶ほ、不信を以て物を成すこと能はず。又た、況んや、人事をや。

× × ×

大凡物、大凡人、その、當に、在べき如くに在り、爲すべき如くに爲すのが、信である。春は、風の吹くのが、信である。夏は、暑いのが、信である。秋は、雨の降るのが、信である。冬は、寒いのが、信である。その、信たる所以は、その在るべき如くに在るからである。

人にも、信がある。人と約束した事は、必らず、これを履行する。一旦、口に出した所は、きつと、これを實行する。人の、當に、爲すべき如くに成すのであつて、卽はち、信である。

同様に、臣として、君に忠を盡し、子として、親に孝を盡すのは、信である。兄弟の相助け、朋友の相信じ、夫婦の相和するのは、信である。人に對して、仁義、禮、智の道を行ふのは、信である。皆、人の爲すべき如くに爲すのであつて同じく信である。

四季は、その信によつてのみ、一切、動植の物を生育させ、成熟させる。人も、その信によつてのみ、修身、齊家、治國、平天下の功を擧げる。不信の人は、爲すべきを爲さない人である。爲すべきを成さないで、爲すべからざれば

身を修めることは出來ぬ。家を齊へるわけには行かぬ。出ては、人に指彈され入りては、家族を饑ゑに泣かせ、所謂る「人非人」を以て一生を終るの外はない治國、平天下の功など、思ひも寄らぬ。

信は、人間生存の根抵である。「民、信なくんば立たず。」といつた孔子は、又た人の生けるや、直し。罔ひて生けるは、幸ひにして免る。

といつてゐる。「幸ひにして免る。」といふのみではない。不信の生は、人間らしからざる生である。禽獸の生である。

信字、訓んで、「まこと」といふ。又た「まかす」といふのは、この身を道に任せるの意である。道に任せるのは、天に任せるのは、自然に任せるのである。天に任せるのは、自然があると一般で、共に、自然である。自然の產なる人が、自然に任せて、信に生きること、理の當然といつてよい。

八の二八　伊藤仁齊仕へず

◇篤く信じて、學を好み、死を守りて、道を善くす。「孔子」

伊藤仁齋は、貧苦徹骨の間に、自學自習して、能く、學業を大成し、傲岸なる狄生徂徠をして、尚ほ且つ、

百年來儒者の巨擘、人才は則はち熊澤、學問は則はち仁齋。

の評あり、

熊澤の智、伊藤の行、これに加ふるに、我れの學を以てせば、東海、初めて一聖人を出さん。

の言あらしむる程の、碩儒、君子人となつた人である。

學、既に成つて、仁齋の貧は、依然として、舊の如くであつた。所へ、諸家の召命は、雨の如く、中にも、紀州家では、祿千石を以て聘せんとし、細川家でも

これに劣らぬ高祿を以て招いて來たが、仁齋は、利祿の爲めに心を動かさず、聖學の講究と後進の教育とを任務として、終生、何人にも仕へなかつた。

× × ×

孔子曰く、「篤く信じて、學を好み、死を守りて、道を善くす。」と。仁齋の事である。又た曰く、

三年學んで、穀に至らざるは、得易からず。

と。終生學んで、終生、穀に至らなかつた仁齋の如きは、古今獨步といつてよい、彼の、僅かに學んで、僅かに知れば、忽ち、官に仕へんことを欲し、仕へて祿を爭ふ者の如きは、學問に不忠實なのである。三年仕へて、三年學ぶ所を忘却して、元の木阿彌になる所以、惟しむを要せぬ。

□朝まだき嵐の山のさむければ
散るもみぢ葉をきぬ人ぞなき。

藤原公任

八の二九　仁齋の井戸浚へ

◇服裝は、紳士を造らず、「英國俚諺」

仁齋の家近くに、共同井戸があつた。或る時、近所合壁の者が集まつて、井戸浚ひを始めると、仁齋も、手傳ひに出かけ、一同、恐縮して、

『手は、我々だけで澤山ですから……』と斷るるのを、

『お志は、あり難い。けれど、私も、この井戸を使つてをるのぢやから、手傳ふのが、當然でせうよ。』といつて、繩を執り、終日、その勞を分つた。

× × ×

一般に、「先生」と崇められ、「紳士」と立てられる者は、傲慢なのが常で、これ等の勞務に服ずるのを、何か、自分の估券に關することのやうに思ひ、こんな際には、精々、代人位ひを出して、その身は、袖手傍觀してゐる。盡すべき義務を

盡し、踐むべき道を踏んで、それが爲めに零になる「估券」は、一體、何んな估券だらう？

彼等の估券は、人物そのものの估券ではなくて、「先生」に似た面つきだけの估券なのである。「紳士」に擬ふ外見だけの估券なのである。

八の三〇　四足よりも六足

◇大言は、俚耳に入らず。「老子」

『急ぎの用事だ。馬で行け。』と命ぜられた僕、厩から馬を引き出して、さて考へたのは、

『四本の足で走るよりも、六本の足で走つた方が、餘程、速からう。』と、自分は馬の後に從いて、

『靑よ、急ぎだ。走れ、去れ。』

船頭多くして、船、山へ登る。

の喩へもある。世の中の事は、數でばかり行くものではない。

代議政治は、多數政治である。といはれる。政治の事は、それでよいかも知れぬが、一般に、眞理は、多數決によつては生れない。衆人の愚論は、一人の名言に如かぬが、盲千人の世の中、「大言は、俚耳に入らず。」で、一人の名言も、衆人の愚論には壓倒されてしまふ。孔子と墨子は、

孔席、煖なるに暇あらず。墨突、黔むことを得ず。

といふ位ゐ、東奔西走、その名言を吐き廻つたけれど、何れの國でも、用ひる者はなく、用ひられるのは、たゞ、衆人の愚論のみであつた。

といふのが、老子の所謂る、

信言は、美ならず。美言は、信ならず。

で、僞り澤山の佞辯の方が、ぶつきらぼうの名言よりも、多數の耳へ、あり難く聞える。解り易い。通じがよい。斯くて、多數決——數で行く議論に、眞理はなくて、却つて、一人の名言に、眞理はある。世の中は、馬鹿なものなか！

八の三一　外を修めて内に及ぶ

◇外相、若し、背かざれば、内證必ず熟す。「吉田義好」

「筆を執れば、物書なれ、樂器をとれば、音を立てんと思ふ。盃をとれば、酒を思ひ、賽をとれば、擁打たんことを思ふ。心は、必ず、事にふれて來る。假にも、不善のたはむれを爲すべからず。

あからさまに、聖教の一句を見れば、何となく、前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むることもあり。假に、今、此文をひろげざらましかば、此事を知らんや。是、則ち、觸るゝ所の益なり。

心、更に起らずとも、佛前にありて、珠數をとり、經をとらば、怠る中にも、善業、自ら修せられ、散亂の心ながらも、繩床に坐せば、覺えずして、禪定なるべし。事理、元より、二ならず。外相、若し、背かざれば、内證、必ず熟す

「強ひて、不信といふべからず。仰ぎて、之を尊むべし。」（徒然草）

× × ×

等しく、精神の修養ながら、内を修めて、外に及ぶこともあり、外を修めて、内に及ぶこともある。人は、その服装、持ち物、周囲の狀況、假初の所作などから、夥しく、感化される。佛前に香を燻くのも、佛への供饌ではなくて、參拜者自ら、その心を清淨ならしめんが爲めであらう。加藤清正が、家中に向つて、

亂舞一圓、堅く、停止たり。太刀を執れば、人を切らんと思ふ。萬事は、一心の置處より生ずる者に候間、武道の外、亂舞稽古の輩、切腹を加ふ可き事。

と嚴命したのも、こゝに見る所があつたのであらう。古歌に、

眞似をせよ、主人に忠義、親に孝。ひたものすれば、眞とぞなる。

といふもの、嘘ではない。

九の一　高山彦九郎欺かる

◇過ちを觀て、こゝに仁を知る。「孔子」

高山彦九郎が、或る年、播磨に遊ぶと、同地の知人等は、その謹嚴を厭ひ、或る夜、室津の妓樓へ誘ひ出して、酒宴を催した。

その席上、美妓が在つて、切りに、彦九郎に媚びを献じ、嬌態縱横、盡さゞる所がなかつた。豫ねて、いい含められてゐたのである。けれど、彦九郎は、たゞ、酒を飲むばかりで一顧をも與へず、恰かも、蚊子の鐵牛を嚙むが如くであつた。妓も、殆んど持て餘した。

酒宴、果てゝ、彦九郎は、寢に就いたが、夜半に、ふと、

目を覺すと、隣室から、顰欷の聲が、洩れ聞えた。
『はてな！』と、起つて窺ふと、先刻の妓である。影仄暗き行燈の下で、顏を疊に押し當て、泣き入つてゐる樣子が、たゞではない。
『何を泣くか、これ女！』と、問ふこと再三に及んで、妓は、漸く、顏をあげ、涙を收めて、
『妾は、元と、武士の娘でございます。只今、こんな稼業をしてをりますのも、深い事情のあることで……』といひさして、復しても泣く。彥九郎は、
『事情といふのは……！』と迫つた。
『先年、父は、人手にかゝつて死にました。女ながらも、親の仇、何とか、討つて取りたいものと、こんな泥水へ身を沈めて、仇を尋ねてをりますが、今以て、廻り遇ひません。縱し、廻り遇つたにしても、纖弱いこの身に、仇が討てやうかと、それを思ひますと、心細くなるのでございます。何卒、お察し下さいまし』。
と、さもさも、憂ひに堪へないものゝ如くに泣くのであつた。
世俗の諺に、

泥中の蓮。
といふ。妓のいふ所に、僞りがないならば、これぞ、正しく、それである。熱血多感の彥九郎は、忽ち心を動かして、
『それは、氣の毒ぢや。何、心配するな。俺が、一臂の力を假して、本望を遂げさせてやる。然し、大事ぢや。決して、人には漏らすまいぞ。』慨然として、斯ういつて、爾來、この妓に同情を寄せ、屢ば、この樓に遊んだ。
彥九郎は、その後、九州久留米の旅館で、屠腹して果てた。時勢を嘆じての事といふ。
後ち幾年、播州赤穗に、女乞食があつた。
『妾は、以前、室津で遊女をしてをりました。或る時、不思議な男を欺して、隨分、金を費はせましたが、その後ち、その男は、高山といふ人で、お國の爲めに諸處遊歷の途中、久留米で切腹されたと聞いて、驚きました。そんな偉い人を欺したかと。思ふと妾は、後悔でなりません。罰が中りはしないかと、心配の餘り髮を剃つて、佛の道へ入りました。』と、懺悔話をした。

× × ×

人間、過ちのない者はない。何事に於て過つかは、人による。仁者は、仁に於て過ち、人に哀れつぽく泣きつかれでもすると、つひ、その欺く所となつて、ない財布の底をも叩く。而も、その失策、その過ちによつて、その仁者たることが判るので、

人の過つや、各の、その黨ひに於てす。過ちを見て、こゝに仁を知る。

とは、この事である。

これは、過ちには相違ない。けれど、貪慾漢が、慾に於て過つて、慾の針にかゝり、吝嗇家が、けちに於て過つて、爪に火を灯し、食ふ物も食はずに、體を損じ、小才子が、小才に於て過つて、油斷のならない男と譏られ、嘘つきが、嘘に於て過つて、長い尻尾を露すのとは、同日の談ではない。

□徳は香氣の如し之を碎けは益々香し。

ベーコン

九の二　北條泰時訟へを聽く

◇訟へを聽くは、吾れ、猶ほ、人のごとし。必らずや。訟へなからしめんか。

「孔子」

北條泰時は、執權就職以來、日毎、勉めて役所へ出て、庶政を見るのに、群衆を待つこと恭謹、訟を聽くこと明恕で、治績が、日に擧つた。

或る時の訟へに、双方、對決といよので、最初の程は、口角、泡を飛ばして論じ合つてゐたが、やがて、一方が、

『私も、只今迄は、自分の言條を善いと思つてをりました。さては、訟へにも及んだのでございまするが、今初めて、自分の非を悟りました。この上は、一言も申し上げることはございませぬ。』と屈服した。泰時は、感心して、

『この喧嘩は、我程、お前の敗ぢや、理非によつて、決斷しやう。但し、自分は

これ迄、數多、訟へを聽いたが、お前のやうに、卽座に、理に服する者を、見たことがない、實に、感心ぢや。』といつて、これに恩賞を與へた。

泰時は、何時も、こんな風に訟へを聽き、恩威を兼ね施した。その結果、後には、追々、訟へもなくなり、訟庭も、閑散を極めたといふ。

「必らずや、訟へなからしめんか。」といつた孔子は、又た、

× × ×

政を爲すに、德を以てすれば、譬へば、北辰のその所に居て、皐星のこれに共ふが如し。

といつた。上に立つ者が、德を以て、政治を施せば、人民は、皆、その德に化せられて、惡事を行ふ者もなくなり、非道を敢へてする者もなくなり、自然訴訟事件もなくなるであらう。が、それは、聖人孔子の如き大政治家に俟つ事で世の常の群小政治家輩には、及ぶべくもない。やはり、法律の力を假りて、罪すべきを罪し、刑すべきを刑して、纔かに、社會の安寧、秩序を保つことが出來る裁判所も、必要である。刑務所も、必要である。

が、單に、それだけであつてはならぬ。これも、孔子の語に、

これを導くに、政を以て、これを齊ふるに、刑を以てすれば、民、免れて恥なし。

とある通り、法制一偏、刑罰一偏の治め方は、人民をして、惡心、その罪を恥ぢしむるに足らぬ。甚だしければ、法律の網を潛つて、惡事を働き、幸ひに免れて、それを得意とする者も出來やう。

これを導くに、德を以てし、これを齊ふるに、禮を以てすれば、恥ありて、且つ格る。

政治の一面は、何うしても、德化といふこと、これでなければならぬ。

所謂る德は、必らずしも、爲政者その人の德ではない。一人の德を以て、天下萬民を感化し得るやうな大政治家は、滅多にはない。孟子の所謂る、

痒序の敎を謹しみ、これに申ぬるに、孝弟の義を以てす。

卽はち、學校を興して、敎育を施すのも、「これを導くに、德を以てし、これを齊ふるに、禮を以てする」のである。

卽はち、これを外にしては、法制、以て、非違を糺し、これを內にしては、教育、以て、德化を施すのが、蓋し、政治の要導である。

但し、この事、今の政治家には、望まれない。彼等の眼中には、法制があつて教育がない。「眞」の教育がない。役人を造つて、「人」を造らない今の教育が、何にならう？　職業的知識を授けて、道を度外視する今の教育が、何にならう？以て、人民を化するに足らぬ。今の政治家が、下らないのである。今の教育者が解らないのである。

それにしても、泰時は、何等の手段によつて、能く、「訟へなからしめ」たか。彼れ、承久の役に、京都へ攻め上つた際、栂尾の上人から、「無慾」の二字を示され、歸來、これを以て、一門に對し、諸士に對し、人民に對した。訴訟事件は、大部分、慾から起る。彼れが德化は、天下の人をして、その慾を制し、爲我的主張を戒しめた。その、「訟へなからしめ」たのは、手段でなく、方法でなく、全く、德化の力であつたのである。偉なるかな、泰時！　鎌倉九代の執權中、時賴、時宗の二人、最も有名であるが、治績に於ては、恐らく、泰時を推すであら

う、今の群政治家とは、勿論、同日の論ではない。

九の三　門と驢と繩とを守る僕

◇道の道とすべきは、常の道に非ず。名の名とすべきは、常の名に非ず。

「老子」

主人、旅行するに就いて、下男を呼んで、

『おい、拔作、俺の不在中は、よく氣をつけて、門を守るんだ。それから、驢馬と繩とに注意しろよと。』いひ置いた。

斯くて、四五日は、何事もなかつたが、或る夜、近所に茶番狂言の催しがあつて、皆の人が、我れも我れもと押しかける。拔作、

『俺も……』と思つたが、主人の命令、門をはなれるわけには行かない。苦心の末、一計を案じ出し、門を打つ倒し、繩で縛つて、驢馬に脊負はせ、彼の狂言を

見に行つた。

所が大變、その後へ泥坊が入つて、金は素より、道具から、衣服から何も、彼も、引つ浚つて行つた。

けれど、拔作は、平氣なもので、歸つた主人に怒られると、

『だがね、旦那、俺あ、お前さんの吩咐け通りに、門と驢馬と繩とを、確かり、守つてたんだから……』

× × ×

無難禪師の歌に、

世の中は、瓢の尻で、鯰の尾、おすが如くに、渡るべきなり。

我々は、左右、物事に拘泥する。一身の利害に拘泥し、他人の毀譽に拘泥し、無意味な習慣に拘泥し、世間の思惑に拘泥し、過去の行きがかりに拘泥して、廣い世の中を我れから狹くし、窮屈にし、融通無碍に働く心、縱横自在の利く手足を、自分で縛つて、一生涯を苦しみ通すとは、何と、哀れなものではないか。

拘泥は、宜しくない、忠、孝、仁、義の道さへも、拘泥すれば、弊を見はす。

老子は、その道德經の首章に、「道の道とすべきは、常の道に非ず。名の名とすべきは、常の名に非ず。」といつてゐるのは、世人拘泥の弊を喝破したに外ならぬ。

世人、いふ所の道は、すべて「道とすべき」道である。それが道、これが道と一々、指摘し得る所の道である。君には、斯く仕へる。これ道。親には、斯く事へる。これ道。人には、斯く施す。これ仁。行ひは、斯く制する。これ義、といつたやうに、指し示すことの出來る道である。

が、斯うした道は、「常の道」ではない。不變不易の道ではない。すべての時すべての場合を通じて、融通無碍に行はれる、といふわけには行かない。時宜次第、種々に變更して、初めて、道としての用をする。

例へば、臣たる者が、君命をこれ奉じ、子たる者が、親の意にこれ從ふのは、確かに、道である。けれど、孔子は、子路に、君への仕へ方を問はれた時、

欺くこと勿れ。而して、これを犯せ。

と答へ、又た、

父、爭子あれば、身、不義に陷らず。

といつてゐる。君の顔せを犯して諫めるのは、君命を奉じないのである。父と善惡、義、不義を爭ふのは、親の意に違ふのである。これを犯し、これを違つて初めて、道に中る。

卽はち、世に所謂る道は、時に應じて、變更するの必要がある。すべての場合に妥當するものではない。

從つて、拘泥すれば、堪ふべからざる弊がある。孟子に、

淳于髡曰く、男女、授け受くるに、親らせざるは、紀か。孟子曰く、紀なり。

曰く、嫂、溺るれば、これを援くるに、手を以てせんか。曰く、嫂、溺るゝに援けざるに、これ、豺狼なり。男女、授け受くるに、親らせざるは、紀なり。嫂、溺るゝに、これを援くるに、手を以てするは、權なり。

男女、親しく、物を授受しない、といふ道に拘泥すれば、嫂の溺れた時も、手をつけることも出來ない。これを見殺しにするの外はない。「これを援くるに、手を以てするは、權道なり。」――權道を以て補ふ時、初めて、道の用をするもの、世人の所謂る道で、融通の利かないこと頗しい。

次に、「名の名とすべきは、常の名に非ず。」――道があれば、こゝに名がある。忠といひ、孝といひ、仁といひ、義といふの類、皆、名である。「道とすべき」道が、常の道でない如く、「名とすべき」名も、常の名ではある。甲の時に於ける忠孝は、乙の時に於ける、不忠、不孝である。丙の場合に於ける仁義は、丁の場合に於ける、不仁、不義である。忠、孝、仁、義の名に拘泥すれば、これ亦た、弊の堪ふべからざるものがある。困窮の人に、金を惠み、物を施すのは、仁であるが、動もすると、相手の獨立心を害ひ、依賴心を增長するの弊がある。仁の名に拘泥すれば、却つて、不仁になる。

世間通常の道は、斯うしたものである。融通が利かない。無碍には行はれない常の道でなく、常の名でない。眞の道は、常の道でなければならぬ。何時、如何なる場合にも、融通無碍に行はれて、少しも、拘泥の弊のない道――これが、眞の道である。

然らば、眞の道、如何？　老子は、右の良句に續けて、

無名は、天地の始め

といつてゐる。この無名こそ、眞の道であり、常の道である、といふ。

老子は、萬有の本體、諸法の實相を認めて、虛無とする。虛無、故に、名がない。强ひて名けて、道と呼び做す。この虛無の道こそ、常の道である。卽はち、眞の道である。

虛無の道は、所謂る道を超越してゐる。善でもなければ、不善でもない。美でもなければ、惡でもない。それ等を超越して、一々、指摘することも出來なければ、仁の、義のと、名をつけることも出來ないものである。

といつて、道德がないのではない。現に、老子の書を「道德經」と名ける。禪に所謂る、

不思善、不思惡。

（善を思はず、惡を思はず。）

で、善不善、美惡を忘れ、たゞ自然、卽はち、事の止むを得る所に從ひ、至情の餘儀なき所を行へば、それが、道に中る、といふもの、卽はち、老子の意である。儒敎に取れば、「誠」である。大學に所謂る「明德」、中庸に所謂る「至善」、こ

れである、

誠は、勉めずして中り、思はずして得。

從容として道に中るは、聖人なり。「中庸」といひ、

吾れ……七十にして、心の欲する所に從つて、矩を踰えず。「孔子」

といふの類、皆、これである。

因つて思ふに、老子の敎へも——道敎も　儒敎も、結局は、同じものである。兩者を目して、枘鑿、相容れないものとし、老子、莊子を異端視するのは、古來、儒家の常であるが、それは、僻見たるを免れぬ。恐らく、老子を知らないのである。老子も、自然を至極の道とし、孔子も、自然を至極の道とする。

遮莫、世人の所謂る道は、拘泥すれば、弊を見はす。一切の物、一切の事、拘泥してよいのはないが、忠、孝、仁、義の道さへも、拘泥するのは宜しくない。主人の言葉に拘泥して、無意味に、門と驢馬と繩とを守つた僕は、飛んだ失敗を演出した。これを稱して、墨守といひ、守株といふ。勉めて、拘泥の弊を避け、

「瓢の尻で鯰の尾、おすが如くに、」世を渡る者、これが、超士である、達人である。

九の四　基督の今日主義

◇一日の苦勞は、一日にて足れり。「基督」

「爾曹のうち、誰れか、能く、おもひ煩ひて、其生命を寸陰も延べ得んや。また、何故に、衣のことを思ひわづらうや。野の百合花は、如何にして長かを思へ。勞めず、紡がざる也。我れ、爾曹に告げん。ソロモンの榮華の極みの時だにも、其裝ひ、この花の一つに及ばざりき。神は、今日、野に在りて、明日、爐に投げ入れらるゝ草をも、如此よそはせ給へば、況して、爾曹をや、嗚呼、信仰うすき者よ。然れば、何を食ひ、何を飲み、何を衣んとて、思ひわずらふ勿れ。此れ、皆異邦人の求むる者なり。爾曹の天の父は、凡べて、此等のものの必需ことを知

りたまへり。爾曹、まづ、神の國と其義とを求めよ。然らば、此等のものは、皆、なんぢらに加へらるべし。此故に、明日の事を憂慮なかれ。明日は、明日の事を思ひわづらへ。一日の苦勞は、一日にて足れり。」(聖書)

× × ×

人間、苦勞のない者はない。生きるとは、苦しむことである。人生卽苦勞、苦勞卽人生——斯うも見られる。

論より證據、苦勞がなくなると、人は、大概、死んでしまふ。

苦勞が、人生ならば——同じ苦しむ世の中ならば、なるべく、價値のあるやう苦しみたい。なるべく、甲斐のある苦勞が、望ましい。志士仁人は、身を殺して、仁を成す。「論語」

迄も、國家、社會、同胞の爲めに苦勞する。基督は、「爾曹、まづ、神の國と其義とを求めよ。」斯くの如き事の爲めに苦勞せよ、といつた。これ、價値のある苦勞である。

小人が、一身の爲め、名利の爲めにする苦勞の如きは、啻に、甲斐のない苦勞

であるのみならず、又た、無價値に近い苦勞である。今日主義を主義として、その日その日を送ればよい。

九の五　松下禪尼障子の切張

◇かばかりの、事に浮世の、習ひぞと、許す心の果てぞ、悲しき。「古歌」

鎌倉の執權北條時賴の母、松下禪尼といつた人は、なかなかの賢夫人であつた。或る時、時賴を招くに就いて、煤けた明り障子の破れた所を、手づから、切張してゐると、禪尼の兄の秋田城介義景が、接待役に來てゐて、

『承はつて、誰某に張らせませう。そんな事には、心得のある者ですから。』といつた。けれど禪尼は、

『その男とて、尼の細工には、及びますまいよ。』といひながら、手を措かなかつた。

義景は、更に、

『全部、張り替へた方が、容易いでせう、それに、斑では、見苦しくもあり……』

……といつた。禪尼は、

『尼も、後には、すつかり、張り替へる心組ぢやが、今日だけは、故意と、斯うするのです。

それには、仔細のあることで、すべて、物は、破れ損じた所を、修理して使ふものぢや、といふことを、若い人に見せて、氣をつけさせる爲めです。』といつたとか。

× × ×

天下に時めく執權の母を以て、障子の切り張りをするとは、儉素の狀、想ふべきである。贅澤に馴れた今の人には、眞とに、好鑑戒としてよい。

但し、障子の切張は、破損の甚はだしかちざるに及んで、すべきである。甚だしきに及べば、その費用と勞力とは、全部、張り替へた方がよい位るである。

人の行ひが、やはり、然うである。如何なる惡人も、その初めは、皆は、可愛

い子供である。紅顔の美少年である。前途多望の好青年である。好青年よ、良い若者よ、といはれた時代に茶屋酒を飲み覺える位ゐが本で、次第に悪事が増長し結局、石川五右衛門の二代目にもなり、熊坂長範の三代目にもなるのである。

悪事に恐ろしいのは、その次第に増長するの邊に在る。地に墜ちた一粒の種は至つて微々たるものである。成長すれは、亭々、雲を凌ぐの大木となる。悪事がやはり、同斷である。

如何せん、小事にば、油斷し易い。

『何、茶屋酒を飲む位ゐが……』と、許してかゝる。「許す」のは、種に水をかけ肥料を施すと一般で、木は、次第に成長する。悪事は、次第に増長する「かばかりの、事は浮世の、習ひぞと、許す心の、果てぞ悲しき。』で終には、手がつけられなくなる。

障子は、小破損の際に、氣をつけて、張り替ふべきである。行ひも、小悪事の中に、心がけて、修省すべきである。

九の六　明慧上人足と阿字

◇君子は、義に喩り、小人は、利に喩る。「孔子」

北條泰時に無慾を敎へた相尾の明慧上人が、或る時、道を通ると、河で馬を洗つてゐる男が、

『足！　足！』といふ。上人は、立ち停つて、

『これは、まあ、貴いことぢや。宿執開發の人であらう。阿字々々といつてをる。』

と感心し、言葉をかけて、

『何方のお馬かの？　餘りの貴さに、尋ねるのぢや。』といふと、

『はい、府生德のお馬でござる。』男の答へに、上人は、益す感心して、

『それは、めでたい事ぢや。經に、

阿字門一切、諸法本不生。

とある。嬉しい結緣をした。』

といつて。感涙を拭つた。

× × ×

人は、その好む所、平生、心かくる所、僻する所に從つて、事物の意味を解釋する。等しく、一枝の梅花である。雪に傲るその强さを、英雄の峻節に比する者もあれば、慧々たるその花瓣を、美人の姿態に比する者もある。夏時、花から花へ移り飛ぶ蜜蜂を見て、その勤勉ぶりに感心する者もあれば、終日、隊を成して餌を漁り廻る蟻を見て、その貯蓄心に驚き入る者もある。古人は、鴉を見て、反哺の孝を知り、鳩を見て、三枝の禮を知つた。小野道風が、柳の枝に飛びつく池の蛙によつて、千挫不屈の忍耐を教へられた話は、小學校の子供も知つてゐる。皆、人相應に、事物を解釋するのである。孔子の所謂る、「君子は、義に喩り、小人は、利に喩る。」の類である。

今、明慧上人は、馬子の言葉を聞いて、佛教の意味に解釋して、感涙を催した

又た又て、その人柄を想ふことか出來る。

九の七　口先のみの一萬兩

◇嘆息す、人間萬事、非なるを。「杜子葉」

王様、退屈で仕様のない所から、伶人を召んで、音樂をやらせ、終ると、

『いや、面白かつた。お蔭で、樂しい思ひをした。褒美には、一萬兩の金を遣はすぞ。』との仰せ。

『伶人は、あり難うござりまする。』と、三拜九拜して引き退り、今日か、明日かと、首を長くして待つてゐても、何の御沙汰もない。待ち倦んで、恐る恐る、

『お約束の御褒美は、如何でござりませう。』と伺ふと、

『うむ、褒美か。褒美は、い、、もう、濟んでる筈ぢやが。』

『否、まだ、頂きませぬ。』

『濟んでる。あの時、一萬兩遣す、といつたな？　あれが、褒美ぢや。』と意外なお言葉に、伶人が、けゞん顏をするのを見て、

『解らぬか、其方は、音樂を奏して、空しく、予の耳を樂しませた。乃で、予も一萬兩遣はす、といつて、空しく、其方の耳を樂しませてやつた、相應はしい褒美ぢやないか。』

『おやおや！』と、伶人は、大失望！

× × ×

「空しい」といへば、音樂の聲のみが、空しいのではない。口先の一萬兩のみが空しいのではない。口先の一萬兩の空しい如く、正金の一萬兩も、亦た空しい。名譽も、空しいものである。財産も、空しいものである。家、屋敷、衣類、諸道具も、空しいものである。官位も、空しいものである。爵祿も、空しいものである。人間萬事、何一つ、空しからぬものはない。

譽れには、譏りが伴ふ。

長者に二代なし。「日本俚諺」

折角溜めた財産も、伴の不心得から、大概、人手に渡つてしまふ。先頃のやうな、大地震、大火事が來れば、家も屋敷も、あつたものではない。

我々小人は、この空しいものの爲めに、年がら年中、憂き身を窶してゐるのである。而も、この身からが、空しいものである。一震災には、東京市内だけでも十萬といふ多數の人が、一度に空しくなつたが、それは、空しくならない筈の人が、空しくなつたわけではなく、彼あした災難に罹らずとも、何れは、空しくなるべき人である。火に燒かれると、黴菌に食はれるとの違ひこそあれ、早晩、空しくなるべき人が、空しくなつたのである。古人の詩に、

百方千計唯爲身。　不知身是冢中塵。
誰言白髮無言語。　此是黃泉傳語人。

（百方千計、唯だ、身の爲めにす。　知らずや、身は、是れ、冢中の塵
誰れか言ふ、白髮、言語無しと。　此れは是れ、黃泉傳語の人。」

「身は、是れ、冢中の塵。」である。到底、地中のものである。煙の如くに空しいものである。

それは、啻に、三五十年の後に、空しくなるのみではなく、現に、空しいものである。地、水、火、風の寄せ細工に、自性とすべきものは、何もない。生きなから、死んでゐるのである。四肢、五體のこの儘で、既に、空しいものである。

「百方千計、唯だ、身の爲めにす。」誰れの爲めの苦勞であらう？

此れが空しければ、彼れも空しい。この身に附屬した名譽と財産は、尙更、空しいものでなければならぬ。空しい身を以て、空しい物の爲めに役々たるもの、これが、人生である、人間である。

九の八　簡略の戒め

◇肝要を選びて、無用を略す。「西川如丸」

「簡略といへば、何もかも略する儀なり、と心得るは、誤りなり。簡の字は、エラブとよみたる字にて、一切の物毎に、肝要なる儀の、致さで叶はざるを、隨分

致して、致しても致さでもよき事をば略するを、簡略とはいふなり。其の肝要を選びて、無用を略する意なり。

此簡略の儀は、貧窮なる上には、守るともなくて、おのづから、行はるゝものなれば、さして、勤めしむるに及ばず。唯、富貴なるうへに、愼み守るべき道なり。簡略、上に行はるゝ時は、いつとなく、下、おのづから、簡略行はるゝものなり。聖賢の道も、簡略を先としたまふものなり。」（西川如丸）

× × ×

我々は、平生、餘計な物を持ち、餘計な事をして、苦しんでゐる。人間々々と大層らしくいふけれど、高が、五尺の一身である。これを養ふのに、何程の道具立てが要らう？　昔は、

一狐裘三十年。

狐の革衣一枚を、三十年間、着通した人もある。物毎に、その肝要を撰んで、無用を略するならば、衣服二三枚、鍋、釜一個づつ、茶碗、箸だけでも、用を達し得て餘りがある。あつて足らず、なくて足るものは、道具である。複雜に、餘

計な物を持つて、苦しむとは、一體、何うした了簡か。

苦しむ――餘計な物を持てば、その物が、束縛となり、その物の爲めに苦しまなければならぬ。

我々の生活は、須らく、簡略、簡單、簡易なるべきである。簡易生活こそ、生活の理想的なるものである。

而も、簡易にすべきものは、獨り、衣、食、住の事のみではない。物的生活以外、心的生活に於ても、我々は、餘計なものを持ち、餘計な事をして、苦しんでゐる。それ等、萬般の事項に亙つて、徹底的整理を加へる時、初めて、徹底的簡易生活がある。

先づ、交友に就いて見る。我々は、餘りに多方面に亙つて、餘りに多くの朋友を持つてゐる。自然、その友朋は、大部分、面朋であり、面友である。楊子曰く

朋として、心あらずんば、面朋なり。友として、心あらずんば、面友なり。

と、大概、これである。百の面友は、一の心友に如かぬ。宜しく、これに整理を加へて、專ら、心友を擇ぶがよい。これ、交友に就いての簡易生活である。

心友の交りも、簡易、淡泊なるをよしとする。複雜、濃厚なるは、永續しない

禮記に、

君子の交りは、淡きこと水の如し、小人の交りは、甘きこと、禮の如し。君子は、淡きを以て成し、小人は、甘きを以て壞る。

とさるもの、鑑みなければならぬ。鑑みて、簡易、淡泊に交はらなければならぬ。

禮の重んずべきは、いふ迄もない。けれど、用もないのに、足繁く往來したり華美な、高價な品物を贈答したりして、それを禮と心得るのが、世間一般である亦た、誤解の甚はだしいもので、孔子は、

禮といひ、禮といふ、玉帛をいはんや。

といつてゐる。こゝにも、整理を加へる餘地があらう。

我々の言語――これ亦た、大に整理を加へ、大に簡易にすべきものの一つである。

口開いて、腹綿見する、柘榴かな。「古句」

といふが、我々は、餘りに、腹綿を見せ過ぎる。

口は、禍ひの門。「日本俚諺」

ともいへば、我々の言語は、少くも、十分の一程度に整理して、何等、不便を感じないであらう。

萬行一心である。交友の事、乃至、言語の事が、複雑に過ぎるのは、畢竟、心の使ひ方の、複雑に過ぎることに歸着する。

眞實、我々は、物的生活に於けると同樣、心的生活に於ても、種々の餘計な物を持つてゐる。曰く憤怒、曰く怨恨、嫉妬、猜忌、嫌悪、羨望、貪慾、吝嗇、殘忍、冷酷の類、皆、餘計な物である。正直にいへばよいものを、嘘を吐く。誠實こそ、最良の方便であるものを、奸智を弄ぶ。過去に屬して、取り返しのつかない事に執着する。明日の天氣も判らない癖に、取越苦勞をする。すべて、餘計な心使ひである。これ等の一切を、念外に放棄し去つて、無我、無心、自然にこれ從ふやうならば、我々の心的生活は、何んなに簡易なものであらう？

而も、この心的簡易生活こそ、あらゆる簡易生活の根柢である。勉めなければ

ならぬ。

九の九　梶子と百合子

◇詩歌は、自由より出たる、言語なり。「カーフィルド」

梶子は、京都祇園林の茶店の、女主である。歌の上手で、家集を「梶の葉」といふ。十四の年の暮に、「歳暮戀」を、

戀ひ〳〵て、今年もあだに、暮れにけり。涙の氷、あすや解けなん。

又た、「夜霰」を、

雪ならば、梢にとめて、あすや見ん。夜の霰の、音のみにして。

これは、秀逸との評のあつた歌である。「立春」の歌、

長閑けしな、豐葦原の、けさの春、水の心も、風の姿も。

百合子は、梶子の茶店を受け繼いだ女である。これも、歌を好んだけれど、梶

子の比ではなかつた。たゞ、『茶店の女で、歌を詠むとは、珍らしい。』といふので田舍迄も、名が聞えた。娘の町子は、畫家大雅に嫁した。

× × ×

大正の今日、歌を詠む女は、珍らしくない。たゞ、彼等に附きものの臭みを厭ふ。祇園林の梶子、百合子は、如何であつたか。

九の一〇 玉瀾の奇行

◇家族團欒の、快樂に、優るものなし。「英國俚諺」

大雅の妻町子が、祇園林百合子の娘であることは、前に一言した。大典禪師の墓誌に、

夫の行ひに配す。

とあるが、その越きは、夫の遺して行つた筆を持つて、後を追ひ、奇妙な挨拶に接しながら、無言で歸つた、一事にも判る。夫に學んで、畫を能くし、玉瀾と號した。

和歌は、夫と、共に、冷泉卿に學んだ。初の參邸に、處柄といひ、且つ、名の聞えてゐたのに、お内の女房たちは、

『何んな女でせう？』と噂し合ひ、今か今かと待つ所、玉瀾が、やつて來た。見ると、糊の硬い木綿衣服を着て、魚籠を提げた樣子が、何の事はない、草鞋を穿かない大原女の如くであつだ。女房たちは、案外して、いふ所を知らなかつた。これ亦た、榮辱を心としない夫の行ひに配するものであつた。

大雅夫婦が、冷泉邸へ參つて、和歌を學ぶやうになつたのは、最初、卿の方から、招かれた事でもあり、加に、富んでゐたわけでもなければ、假初の禮儀で濟んだのを、夫婦は、他の門弟にも勝つて、季節々々の謝物を調へ、卿へ贈つた。『歌は、彼れの氣象に應ずるやうに、添削してやつた。』とは、卿の言葉であつた。或る時、卿から、戯れに、赤前垂を與へられると、春の頃など、梶子は、それ

を締めて、母の名殘の茶店へ出ることもあつた。

夫大雅は、時々、三味線の興といふものを彈き、寂びた聲で歌つた。その都度町子は、古びた筑紫箏にかけて彈き、合奏して樂しんだ。夫の死後數年、町子も世を去つた。

× × ×

大雅の超脱ぶりは、前に記した。この夫にして、この妻あり、玉瀾が、榮辱を心としなかつたのは、まことに、夫婦一双「似た者夫婦」の上乘なるものであつた。

榮辱を心としないといふこと、口でいふに雜作はないが、身に行ふ段になると諺、甚はだ、容易でない。他人の毀譽褒貶には、餘程の大人物も、心を動かす。

世を擧げて、これを案むるも、勸むるを加へず。世を擧げて、これを非るも沮むを加へず。「莊子」

の超脱は、精神の修養が、その至處に及んだ者でなければ、その消息を窺ひ知ることは出來ぬ。

女子に取つては、この事、殊に難かしい。女子の心的生活は、概して、感覺的である、覺性的である。見る所、聞く所に從つて、心がぐらつく。外見を飾りたがるのも、虚榮心が強いのも、そして、他人の毀譽を、甚だしく氣にするのも、皆、これが爲めである。榮辱を心としないなどは、到底、女子には望まれない。

この間に在つて、獨り、玉瀾が、能く、榮辱を心とせず、糊の硬い木綿衣服に魚籠を提げて、貴人の門を出入したり、赤前垂を締めて、祇園林の茶店に現はれ女中同樣に立ち働いたりして、少しも、恥づる色がなかつたのは、一奇としてよい。知らず、那の邊から、這般の超脱を體得したか。

想ふに、それは、夫大雅の感化によつたのである。諺に「似た者夫婦。」とは、似た者が、夫婦になるのではなくて、夫婦になつたが爲めに、次第に相似るのである。吾等は、妻玉瀾の超脱に敬意を拂ふと同時に、より多く、夫大雅の超脱に敬意を拂ふ者である。

九の一　見榮坊の大失敗

◇見る人も、見らるゝ人も、うたゝねの、夢まぼろしの、浮世ならずや。

「脇坂義堂」

或る貧乏人、食ふ物のない所から、菜つ葉をうんと詰め込んで、外へ出ると、向ふから、平素、最負にして呉れる金持ちの隱居が、やつて來る。

『御隱居さんぢやありませんか。今日は！』

『おゝ、吉さんか。何方へ？』

『天氣も好し、しますから、散歩に出ました。』

『散歩か。では、飯でも食はう。』

『飯ですか。飯はね、家を出がけに、刺身で食つて、今又た、つひそこで、鷄肉でやりましたから、もう澤山です。』

『酒は？……』

『結構ですなあ。酒なら、遠慮はしませんよ。』

『ぢや、お出で！』といふ隱居に從いて、左ある料理屋へ入り、後腹の痛まないロハ酒、この時こそ、といつた氣で、飲むこと！　飲むこと！　約そ三升ばかりもやつたらうと思ふ頃、流石の吉公も、堪らなくなり、座敷の眞ん中で、

『げいッ、げいッ……』

隱居は、それを見て、

『お前、雞肉で飯を食つたといふが、今、お前の吐き出した物を見ると、菜つ葉ばかりだ。何うしたわけだらう？』と不審がると、吉公は、苦しさうに、胸を撫でながら、

『私は、確かに、雞肉を食つたんだが、すると、鷄が、菜つ葉を食つてたのですね。』

× × ×

志を精神の修養に存する者は、最も、眞面目でなければならぬ、外見を飾ら

うなどの考へを棄てゝ、專ら、實質を良くすることに勉める。他人に買ひ被られやうの野心を去つて、一に、眞價を高めることに力める。これが、精神修養に眞面目なのである。これでなければ、能く、修養の目的を達して、聖賢の列に入ることは出來ぬ。

されば、人間に在つて、最も不思議な心持ちは、虛榮心である。虛榮を貪る人位ゐ、世にも、滑稽なものはない。實質以上に良く見られた所で、實質が拙いのでは、何にもなるまいではないか。眞價以上に買ひ被られだ所で、眞價が二束三文では、自ら顧みて、一向、嬉しくもあるまいではないか。美衣を着飾り、金時計をぶら提げ、頭の物から足の物迄、調べに調べて、美しく見せかける。俳優の眞似をする。舞臺の殿樣——幕が閉つて、樂屋へ入れば、たゞの一藝人、昔の所謂る河原者——これでは詰らぬ。

猿に冠。「日本俚諺」

實質が猿では、眞實、詰るまいと思はれるが、世の虛榮を貪る人は、その身の猿たることを放つて置いて、たゞ、冠ばかりを氣にする。その心理狀態が解らな

い。

のみならず、人にも眼がある。一時は、買ひ被らう。久しきに及べば、必らず眞價を看破する。人が看破するよりも、自分で自白する場合が多い。話の貧乏人は、茶つ葉を吐いた。今の世に多い虛榮家は、追つけ、何を吐かうとするか。無學か、無智か、亦貧乏か。何れ、滑稽な結果になり行くに相違はない。

九の二二　荀子の性惡說

◇拂はゞや、心の中の、塵あぐた。草の庵は、とにもかくにも。「僧宿快」

「人の性は、惡にして、其の善なる者は、僞りなり。今、人の性、生じて、利を好むことあり。是れに順ふ。故に、爭奪生じて、辭讓亡す。生じて、疾惡あり、是れに順ふ。故に、殘賊生じて、忠信亡す。生じて、耳目の欲あり。聲色を好むことあり。是れに順ふ。故に　淫亂生じて、禮義、文理、亡す。然らば、卽はち

人の性に從ひ、人の情に順へば、必らず、爭奪に出で、犯分、亂理に合して、暴に歸す。故に、必らず、將た、師法の化、禮義の道ありて、然る後ち、辭讓に出で、文理に合して、治に歸す、此を用つて、之れを觀る、然らば、則はち、人の性の惡なること、明かなり。其の善なる者は、僞りなり、故に、拘木は、必らず將た、隱括、蒸矯を待ちて、然る後ち、直なり。鈍金は、必らず、將らず礱厲を待ちて、然る後ち、利なり、今、人の性の惡なる、必らず、將た、師法を待ちて然る後ち、正しく、禮義を得て、然る後ち治まる。今、人、師法なければ、則はち、偏險にして、正しからず。禮義なければ、則はち、悖亂して治まらず。」

（荀子）

× × ×

孟子には、性善說があり、荀子には、性惡說がある。何れが當？　何れが不當これを決するには、先づ、以て善といひ、惡といふ、何の意であるかを、見定めなければならぬ。滅多に、性善、性惡をいふのは、無意味である。

通例、利他を善とし、利己を惡とする。利他の善たるは、然ることながら、一

概に、利己を惡とするのは、間違つてゐる。利他と利己とが、互ひに、相扞格し相衝突する時にのみ、利己は、惡である。

性といへば、利他も、性である。利己も、性である。世に、利他心のみの人もなければ、利己心のみの人もない。

この點から見て、孟子の性善說、荀子の性惡說、共に、楯の半面を捉へたに過ぎない。眞理は、兩說の中間に在る。人の性は、專ら善でもなく、專ら惡でもなく、卒ろ、善惡を兼ね備へたものでなければならぬ。

人の性を善とせんか。世に、惡人の多く、惡事の盛んに行はれる理由が解らない。人を人らしくする爲めに、何故、教化の必要があるか。その理由が解らない特に、教化を待たずとも——放つて置いても、千人、萬人、皆、善人となるべきである。

人の性を惡とせんか。これに向つて、何んな教化を施したとて、善人にはならない筈である。石地に蒔いた種の生へない如く、聖人の教訓も、君子の模範？、徒爲に歸する筈である。第一、この世界に、聖人、君子のある理由が解らない。

斯く、人の性が、一面、善であつて、他面、悪であることは、人が、教化され得るものであつて、又た、教化されなければならないものであることを意味する孟子の性善説を聞いて、油斷してはならぬ。荀子の性悪説を聞いて、失望してはならぬ。孔子曰く、

性、相近く、習ひ、相遠し。

と。古歌に曰く、

手枕の、すき洩る風も、寒かりき。身はならはしの、物にぞありける。

と。何事も、「習ひ」に在る。教化に在る。性の善悪に頓着なく、たゞたゞ、精神の修養に勉力するのが、蓋し、最良の方策であらう。

□人は、生涯盡すべき義務を有す、故に、生命を棄てゝ、此の、義務を免かれんとするは、道にあらず。

カント

九の一三　大石良雄仁齋に學ぶ

◇六經、我れを著はし、我れ、六經を著はす。「陸藤山」

伊藤東涯は、仁齋の子である。その盍簪錄にいふ、

先生、生徒を教授すること四十餘年、諸州の人、國として至らざるなし。たゞ、飛彈、佐渡、壹岐三州の人、門に及ばず。

と。赤穗義士の統領大石良雄も、嘗つて、贄を仁齋に取つた一人であるとか、こんな說がある。良雄、一日、仁齋の講筵に列した。而も、時々、坐睡る。門人等は、じつと、笑ひを匿してゐたが、良雄の退いて後ち、

『あんな懶惰漢は、學ばない方がいゝ。』と垢罵した。仁齋は、それを聞いて、

『小子、妄りに誘つてはならぬ。自分の見る所、彼れ、決して、凡庸の器ではない。必らず、大事に堪へるであらう。』といつたが、その言は、果然、適中した、

といふのである。

× × ×

學問の要は、己れの一心を知るに在る。孟子曰く、

萬物、我れに備はる。

と。一心を知る者は、又た、萬事を知り、宇宙を知る。

であるから、書を讀むこと、必らずしも、學問ではない。書物は、これ、月を指さすの指、門を叩くの瓦子に過ぎぬ。人をその一心に導くの方便たる限りに於て、書物の必要はある。若し、書を讀んで、書に因はれ、字義の穿鑿や、訓詁の詮議に拘はつて、却つて、一心を度外に置く者があるならば、その讀む所、萬卷に及ぶとも、彼れは、畢竟、書を讀まないのである。

學問を賣りものにする者には、字義の穿鑿も、必要であらう。見榮に學問する者には、訓詁の詮議も、必要であらう。吾等は、常に、自ら戒しめてゐる。『自分は、決して、學者ぢやない。又た、學者にならうなどは、自分の柄にない貪つて、多く讀まうとしてはならぬ。貪るのは、何につけても、宜しくない。四

書を始め、老子、莊子、佛書の四五種の外、西洋哲學書中の重なるものを、精讀すればよい。

多讀は、精讀に如かず。

だ、所謂る精讀とは、成程と自得し得る迄、心を罩めて讀むことで、字義が何うの、出典が斯うのと、そんなことを穿鑿するの意味ぢやない「精讀」よりも、寧ろ、「精思」じや。少々、讀み方が間違つてもよい。書中、意味の通じない所があつてもよい。たゞ、大體を掴む。指に執して、月を忘れるな。凡子に着して、門内を措くな。書といへば、我が一心こそ、眞の書だ。

六經は、我が注脚のみ。「陸象山」

文字の末に拘々として、大體を失ひ、一心を閑却するやうならば、最初から、書を讀まない方がよい。大乘起信論には、

言を以て、言を忘る。

の一句がある。書を讀んで、書を忘れる。こゝに於てか、書の用がある。と。要約して、これをいへば、大體を得て、精思を加へ、一心を知つて、自得に至

る。」といふもの、吾等平生の讀書法である。

大石良雄の讀書法が、やはり、これではなかつたか。彼れは、先づ以て、大體を得やうとした。字義の末などは、その何うでもよいとした所で、從つて、仁齋先生の講義がそれ等に及ぶ毎に、つひ、坐睡りが出たのであらう。

但し、良雄が、仁齋の門に遊んだとの說には、疑問がある。

九の一四　荻生徂徠の博學

◇智識に貴ぶ所は、其の量にあらずして、其質にあり。「サミュル、ソービア」

大岡越前守忠相、荻生徂徠の、博學洽聞、知らざる所がない、とのことを耳にして、

『よし、自分が、一つ、質問を出して、間誤つかしてやらう。』と、或る日、徂徠を招いて、

『昔から、鼠の嫁入り云々の話がある。あれは、何の事であらう？』と問ふた。

徂徠は、聲に應じて、その話が、何時、何といふ者の著はした一小說に出てゐること、それに據ると、鼠の眷族、親は誰れ、聟は誰れ、嫁は誰れ、舅、姑は、誰れと、明細を極めて說き明した。流石の越前守も、その强記に敬服した。

× × ×

徂徠の博學と强記とは、成程、敬服の外はないが、仰も、餘計な詮議をしたものである。こんな事に迄、若干の時間と腦力とを割くのが、學者の本領であるならば、人間、學者となる、亦た、辛いかなである。

九の一五　齊人その妻妾に驕る

◇善く讀む者は、多きを以てするに非ず。要は、自得如何に在り。「春日潛庵」

齊の人に、一妻、一妾と同棲する者があつた。外出毎に、酒と肉に醉いて歸

る、妻が、相手を尋ねると、良人の答へる所は、盡く、富者、貴人である。妻は不思議でならぬ。妾に向つて、

『良人は、あんなことをいふけれど、誰れ一人、訪ねて來る者がない。何とか、行く先を突き止めたいと思ふが、何うだらう』と相談した。妾も、

『それがいゝでせう。』との言葉に、或る朝、早く起きて、見え隠れに、良人の跡をつけた。すると、驚くべし！　墓地へ行つて、葬式の餘り物を乞ひ、一個所で足りなければ、他所へ行つて、更に乞ふといふ、まことに醜い眞似をして、肉に饜き、酒に醉ふのであつた。

妻は、呆れながら、早々、家へ歸つて、妾に語り、

『良人は、妾たちが、終生を托する人ぢや。その人が、そんな風であらうとは……と、共に、良人を譏り、相抱いて、中庭に泣いてゐると、何も知らない良人は、意氣揚々、歸つて來て、相變らず、妻妾に驕つた。

× × ×

孟子は、右の話に就いて、

君子より、これを觀れば、人の富貴、利達を求むる所以のもの、その妻妾すら、羞ぢずして、相泣かざる者、幾んど稀れなり。

といつてゐる。只管、富貴の人に阿つて、お世辭だらだら、或ひは、お髯の塵を拂ひ、或ひは、お履物をお揃へ申す醜態は、成程、妻にも恥づかしいであらう。子供にも見せられた圖ではあるまい。その癖、こんな手合に限つて、他人には、横柄な面を見せる。

が、學者の中にも、これに似た卑劣漢があらう。古人の糟粕を嘗め、他人の知識を鵜呑みにして、一廉の學者を氣取る。これ、祭者の餘りを乞うて、饜足の道とするのと、同樣の卑劣行爲でなければならぬ。

といふのが、學問には、自得を貴ぶ。聖賢の書を讀んでも、讀む所が、自分のものにならない以上、讀書萬卷も、博覽强記も、こけ威しの豪具に過ぎない。成程と合點し、この合點した所に、心が落ちつく――これを稱して自得といひ、己れの一心を知り得たものに近い。鵜呑み學問が、何にならう？　訓詁、記誦は、識者の屑しとしない所である。古人の糟粕を嘗めて甘しとする學者は、話の齊人

と一般の卑劣漢である。

因つて思ふに、聖賢の書を讀む者が、たゞたゞ、聖賢の意を明かにしやうとするのも、如何かと思はれる。山鹿素行、伊藤仁齋などは、程子、朱子など諸宋儒の說を目して、聖人孔子の意を失ふものとして、所謂る古學なるものを唱導した古學、果して、聖人の意を得てゐるか。程朱、果して、孔子の意を失つたか。孔子の意は、主として、これを論語に徵する。論語は、孔子の言行隻語を蒐錄したものである。これを通して、遺憾なく孔子の意を得ることは、能ふべくもない。況んや、何事、何物にも、

曰く、いひ難し。「孟子」

の境があつて、孔子も、恐らく、その意の在る所を、充分にはいひ盡し得なかつたものと想像されるに於てをや、である。

假りに、素行と仁齋が、孔子の意を得たにしても、それが、孔子の意たるに止まる限り、詮のないことである。學問の要が、己れの一心を知るに在るならば、孔子の意は左に右、自分で、成程と合點が行き、この心の落ちつく處。自得する

處にこそ、一心の理が在るとして、滿足するに如かぬ。他人の意を得るよりも、己れの一心を知るのが、より以上に大切である。吾等は、勿論、素行を偉とする仁齋に敬服する。これを偉とし、これに敬服するのは、その、孔子の意を得たが爲めではなくて、能く自得し、能く安心し、能く一心を知り得た人たちであることに對して、敢へて、敬意を拂はんとするのである。

九の一六　王陽明の尊經閣記

◇至道、外、得せず。一悟、群闇を失す。「王陽明」

「聖人の、六經を述ぶるは、猶は、世の父祖の、子孫に遺すに、名數、條目を以てし、以て、その家の產業、庫藏を記藉するがごときのみ。たゞ、心は、乃はち產業、庫藏の實なり。世儒、六經の實を吾か心に求むることを知らずして、徒らに、影響に考索し、文義に牽制せらる。これ、猶ほ、子孫の、その產業、庫藏の

實積を守視し、享用するを務めずして、窶人、丐夫となるに至るも、その記籍を指し、これ、吾が産業、庫藏の積なりといふがごときなり。」（王陽明）

× × ×

大切なのは、財産である。その目錄は、いふに足らぬ。貴いのは、一心である書物は、手段に止まる。一心を措いて、書物に固着し、財産を棄てゝ、目錄を死守する者は、その愚、及ぶべからずである。

王陽明は、又た、詩を作つて、

無聲無臭獨知時。　此是乾坤萬有基。
拋二却自家無盡藏一。　沿レ門持レ鉢效二貧兒一。

（無聲、無臭、獨知の時。此れは是れ、乾坤、萬有の基。自家の無盡歳を拋却した、門に沿ひ、鉢を持して、貧兒に效ふ。）

といつた。「無聲、無臭、獨知」する所は、一心である。この一心、これ、萬理を備へて、天地、萬物の大本である。この一心を知ればよい。一心を外にして、書物に拘泥し、字義と出典に沒頭するのは、「自家の無盡藏」を棄てゝ、他人の門

に哀を乞ふのと一般である。

であるから、前にもいふ通り、書を讀む者は、大體を得て、精思を加へ、一心を知つて、こゝに自得する、の方法に於てすべきである。

九の一七　俳人瓢水奇行多し

◇觀ずれば、花も葉もなし、山の芋。「瓢水」

播州加古郡別府村の人、瀧野新之丞、剃髪して、自得といつた。富春齋瓢水はその俳號である、舊と、千石船の七般も持つた富豪であつたが、生來、無我の人で、産業を意としなかつたので、後には、赤貧に陷つた。

酒井侯が、始めて、封を姫路へ移された頃、瓢水の風流を聞かれて、領内巡覽の序でに、駕をその邸に駐められた。然るに、夜に及んで、瓢水の行方が知れなくなり、侯も、不興の面持ちで、歸城せられた。

すると、二三日して、ぶらり、瓢水が、歸つて來た。人が、
『何うなされた？』と訊くと、
『いや、あの晩、月の好さに、須磨の眺めが床しくなり、何心もなく、行つて來たのよ。』と答へて、洒然としてゐた。
又た、近村の小川の橋を渡らうとして、足を踏み外し、どつとしたへ落ちたその邊の農夫で、瓢水を見知つたのが、大に驚き、馳せ寄つて、引き揚げやうとすると、當人は、平氣なもの、川の中にゐながら、懷ろの餅を食つてゐた。
京に在つた頃、如柳といふ畫家が、瓢水の貧乏を憐れんで、數十枚の繪を與へ
『これに發句を題して、人に配られたら、幾らかの金になりませう。』と教へた。
瓢水も、流石に喜んで、懷ろへ入れて歸つたが、他日、如柳が、
『繪は、何うせられた？』と尋ねると、
『あの歸りに、どこかで、落してしまつて……』とばかり、濟まないとの顏もしなかつた。所行、大概、この類で、奇とすべきものが多かつた。
俳諧は、上手であつた。大阪の知人が、遊女を落籍しやうとするのを諫めて、

手に取るな。やはり野に置け、蓮華草。
母の喪に、墓へ參つて、
さればとて、花に蒲團も、着せられず。
白隱和尙賞美の句に、
有りと見て、無きは常なり。水の月、
達磨尊者背面の圖に題して、
觀ずれば、花も葉もなし。山の芋。
生涯の秀句といふのは、
ほろ〳〵と、雨そふ須磨の、蚊遣哉。
高齡、八十に垂んとして、世を去つた。

× × ×

無我、無慾、爲めに家產を蕩盡するに至つた瓢水の事は、學び得る事でもなく學ぶべき事でもないが、たゞたゞ、金を溜めるをのみ能事とする俗物に比すれば甚はだ高しとしなければならぬ。

無我の人の眼中には、諸侯もない、平民もない。

『客人を放つて置いて、須磨へ月見に行くのは、禮儀に背く。』などと、この際、繩墨の論は、殺風景である。たゞ、無我の情を見ればよい。無我の俳人が、如何に切に、天然を愛したか、その心持を想ひやればよい。

橋から落ちた儘、川中で餅を食つてゐたのは、無我に徹底してゐたのである。

無我の人には、山上、水中、到る處に樂地がある。

君子、入るとして自得せざるなし。「中庸」

である。

無我で、自然に逆はなかつたければこそ、橋から落ちても、怪我をしなかつたのであらう。

繪の事も、無我で、物に拘はらなかつた氣象を示してゐる。

「手に取るな。やはり野に置け、蓮華草。」——手に取るのは、有我の爲である。私心、私慾を用ひなければ、物をして、その在るが如くに在らしめて、その自然を樂しむことが出來る。

「有りと見て、無きは常なり、水の月。」——一句、以て、佛教の空理を道破してゐる。

「觀すれば、花も葉もなし。山の芋。」——色は、卽はち、空である。空は、卽はち、色である。所謂る、差別卽平等の理である。皆、無我の心持ちを見るに足る。

九の一八　俳人北枝拘はらず

◇三界は、皆、無常なり。諸有に樂みあることなし。「涅槃經」

磨工北枝は、加州金澤の俳人である。芭蕉は、その俳才を感じて「北方の逸士」と稱した。酒が好きで、軒並びの酒屋、如柳の家へ、毎日、飲みに行くと、遂には、如柳の方で、倦きて來た。北枝も、今は、取りつく島もなくてゐたが、夏の日、突然、訪ねて行つて、下女に、

『糠味噌はないかの？』と尋ねた。下女は酒の事と合點して、
『ありません。』と答へた。
『なけりや、一杯だ。』と、妙な所に理屈をつけて、酒を要求した。如柳は、腹を抱へて大笑ひ！　結局、盃を許した。
憂酒や、我れと乘込む、火の車。
とは、北枝その時の句である。
或る夜、北枝の家で、俳諧の催しがあつた。最早、三更と思ふ頃、人があつて、
『お宅へ、盗人が入りましたよ。』と急報した。北枝は、
『然やうか。』とばかり、打ち笑ひ、
『何れ、煤掃きには出て行くぢやろ。』と戯れた。爲めに、一同も、落ちついて、席を崩さなかつた。
時に、一人が、
世間話に、茶釜ちん〳〵。

といふ前句を出した。北枝は、取り敢へず、
盗人の、目にかけらるゝ、めでたさよ。
と附けた。
元祿中、金澤に大火があつて、家々、大半は曠野となり、北枝の家も、類燒した。知人數多、これを見舞ふと、
燒けにけり、されども花は、散すまし。
といつて、自若としてゐた。
『この老人は、よくよく、世の無常といふことを知つてをられる。』といつて、時人、皆、感じ合つた。
その後ち、再び、火事に遇つた。門人、從吾が、眞つ先にやつて來て、
『昔の御氣象如何でせう？』といひながら、諸共に、硯も筆も、すみとなる畑の中に、一句作麼、
の一首を示すと、一枝は、答へて、
諸共に、硯も筆も、すみとなり、その言の葉を、かくものぞなき。

斯うした變事の中にも、滑稽を忘れなかつたのである。

後ち、從吾が、病氣に罹ると、北枝は、絶えず、訪ねて行つて、湯粥の世話迄もしたが、左右する中、病氣が重り、最早、絶望といふことになると、ばつたり足を絶つた。人々は、

『駄目となると、もう、見舞はれぬ。薄情な人ではある。』と譏つた。

然るに、從吾が、到頭、死んだと聞くと、慌てゝ、馳せ着け、殯室へ飛び込みざま、棺を叩いて、

『從吾、從吾、俺を捨てゝ……』とのみ、後は、大聲で泣き出した。

人々は、始めて、北枝の眞意を知つた。

『病人を見るに忍びかねて、久しく、見舞はれなんだものと見える。』といつて、何れも、淺からず感動した。

× × ×

北枝は、「飛島川の常なきを、よく辨へたる風士」(俳家奇人談)であつて、といふ、無常の世である。世に、何一つ、あてになるものはない。何一つ「確か」と

して心を許し得るものはない。何一つ、恃みになるものはない。財産、官爵、地位、名譽、親子、兄弟、夫婦、朋友の誼み——そんなものは、殆んど、水の上の泡である。自分の命からが、水の上の泡である。北枝は、この事を熟知してゐた。

從つて、何事、何物にも拘泥しなかつた。人が、何事、何物かに拘泥するのはその事、その物を重視するからである。何事、何物をも重視せず、これを目して水の上の泡とした北枝が、又た、何事、何物にも拘泥しなかつたこと、不思議ではない。盜人の入つたが、何であらう？　火事で燒けたが、何であらう？　元々あてにしなかつたものである。なくなつたとて、燒けたとて、一向、はや、驚くには足らぬ、といふもの、即はち、北枝の心持ちであつたのである。

火事といへば、恐ろしかつたのは。先頃の大震大火災である。知人に問はれて

『何、私などは、年中、火事に遇つてるやうなものだから……』と、口にはいつたが、吾等もやはり、怖かつた。然し、無常の世の中である。我々は、年中、火事に遇ひ、年中、地震に遇ひ年中、洪水に遇ひ、年中、海嘯に遇つてゐるやうな

心持ちで日を送り、何事、何物をもあてにせず、我が命さへも、水の上の泡とのみ見て、これに拘泥しいなやう、心がけるのは、處世法の最も賢明なるものでなければならぬ。

何事、何物にも拘泥しなかつた北枝、獨り、門人從吾の死に於て、悲痛慨嘆、彼れの如くであつたのは、何故か、それは、人情である。親しい者の死に會して、

枯木、寒巖に倚る。三冬、暖氣なし。

とばかり、冷然としてゐるやうならば、北枝、決して、人間の屬ではない。而も、無常を辨へ、人命のあてにならないことを知つてゐた北枝である。悲痛、度を過して、心を傷り、身を害ふには至らなかつたであらう。

□面白き。奇談は數多の實例を與ふ、此の實例は、我が行爲に關して、有用のものなり、

メルモス

九の一九　我が影に怒る人

◇我が佛法の中、心を以て主と爲す、一切諸法、心に由らざるはなし。

「地觀經」

長者の息子、新たに、妻を迎へた。夫婦の仲も、いと睦まじく、或る日、夫は妻に向つて、

『お前、厨へ行つて、酒を取つて來な、二人で飲まう。』といふと、妻は、『はい。』と答へて、尻輕に厨へ行き、瓶の蓋を取つて見て吃驚仰天、此方へ引き返し、夫の胸倉を取つて、

『良人は、酷い人だ、あんな處へ、女を隱して置く。餘りだ、餘りだ。』と喚く。

夫は、合點が行かない。

『そんな事をするものか。ぢや、私が、見て來やう。』と、これも、瓶を覗いて吃驚し、取つて返すと、

『お前こそ、不都合極まる。男を隠してゐるぢやないか、』と猛り立ち、こゝに、大喧嘩をおつ始めた。

時に、一人の道人があつて、騒ぎを聞きつけ、

『では、愚僧が、見定めて上げる。靜かにするがよい。』と取り鎭め、つくづく、瓶の内外を調べて、結局、その影であることを突止め、夫婦に向つて、

『お前がたは、自分の影を見て、實と心得、泣いたり笑つたりしてをるのぢや。今、愚僧が、瓶から人間を出して見せる。』といふと、石を取つて、瓶に打ちつけた。瓶が壞れて、酒が盡きると、影も消えた。夫婦は、大に慚ぢ入り、赤面しながら、道人に謝した。

× × ×

天地、萬物は、皆、我々自身の影である。日月星辰、山川草木、野に咲く花、樹に鳴く鳥の類、一心を外にして、別にそのものがあるのではない。老莊、これを談じ、宋儒これを語り、佛教、最も、これを說き、西洋の哲學者、亦た、こゝに所見がある。

この事、明かにしなければならぬ。此れを知る者にして、初めて、彼れを知るに堪へる。彼れとは、如何？　宇宙である。人生である。

九の二〇　養ひ飼ふもの

◇生を苦めて、目を悅ばしむるは、桀討が心なり。「吉田義好」

養ひ飼ふものには、馬、牛、繫ぎ苦むること、いたましけれど、なくてかなはぬものなれば、如何はせん、犬は、守り禦ぐ務め、人にもまさりたれば、必ずあるべし。されど、家毎にあるものなれば、ことさらに求め飼はずともありなん。

その外の鳥獸、すべて、用なきものなり。走る獸は、檻に籠め、鎖をさゝれ、飛ぶ鳥は、翼を切り、籠に入れられて、雲を戀ひ、野山を思ふ。愁、止む時なしその思、我が身に當りて、忍び難くば、心あらん人、これを樂まんや。生を苦めて、目を喜ばしむるは、桀討が心なり。

王子猷が鳥を愛せし、林に樂ぶを見て、逍遥の友としき、捕へ苦めたるに非ず凡そ、珍しき鳥、怪しき獸、國に養はずとこそ、書にも侍るなれ。(徒然草)

× × × ×

宗學の祖ともいふべき周茂叔は、平生、窓前の草を除かず、問ふ者があると、『自家の意思と一般ぢや。』と答へたとか、心ある人は、無心の草木をさへ、妄りに擂み取り、伐り取らないものである。況んや、有情の鳥獸を苦しめて、自ら樂みとするなどは、確かに、桀討の心でなけらばならぬ。

が、人間、誰れとて、桀討の心を有しない者はない。學者の說に、動物には、肉食をするものと、菜色をするものとがある。前者ば、概して、獰猛であり、殘忍である。從つて、各個、單獨に生活する。後者は、一般に、溫順であり、柔和である。能く、多數、群を成して、社會的に生活する。人間は、肉食もすれば、菜色もする。これ、一面に於ては、肉食動物の殘忍な天性を具へ、他面に於ては菜色動物の溫和な性質を備ゐる所以である、といふ。果して然らば、人に桀討の心があるのは、その自然である。

それは、確かに、自然である。同時に、柔和、能く物を憐れむのも、亦た、自然である。兩者の價値關係を定め、彼れを抑へて、此れを揚げるのも、亦た、自然である。自然を以て自然を制する所に、人格の意義がある。卽はち、「眞の」自然がある。桀討の心を逞ましくして、鳥獸を苦しめ以て快とするのは、自然に似て自然ではない。

九の二二　僧似雲の春雨亭

◇我が庵は、かたも定めず、ゆく雲の、立居さはらぬ、空とこそ思へ。

「似雲」

僧似雲は、安藝の國廣島の人である。歌を好み、名山、靈地、此處彼處に遊んで、住所を定めなかつたので、世に今西行といつた。それを耳にして、西行に、姿ばかりは、似たれども、心は雪と、墨ぞめの袖。

河内の國弘川寺の唯行塚は、西行の墓である。尋ね求めて、石を建て、寺にあつた肖像を捜し出して來て、堂を造り、自分も、山中に庵を結び、春雨亭と名けて住んだ。

春雨亭の廣さは、疊二枚に過ぎなかつた。人が見て、

『今少し、廣くし給へ。』といふと、

我が庵は、かたも定めず、ゆく雲の、立居さはらぬ、空とこそ思へ。

とばかり、澄してゐた。食事は、搔餅二片を一日の糧とし、飯を炊ぐ手數を省いた。

又た、山に多數櫻を植ゑさせ、石に彫つた歌に、

折り添へて、あたに散らすな。山柴に、まじるさくらの、しづ枝なりとも。

名詮自稱、須磨の浦、嵐山の麓、吉野苔清水、高野の奥、龍門の瀧の邊りなど世離れた諸所に住み、齡八旬に餘つて、和泉の國蹲尾の富豪北村氏に身を寄せ、そこで歿した。遺族は、遺言によつて、弘川寺に送り、西行と同じ樣の塚を築い

た。

× × ×

昔し、基督は、

野の狐には穴あり、人の子は、枕する處なし。

と嘆じたが、幸ひなるかな、我々には家があつて、如何に狹くとも、高枕安眠の快を貧るには足る。あり難い次第！

然し、餘り、家に頓着するも、窮屈なことになつてしまふ。九尺二間を狹いとし、千疊敷を廣いとするけれど、所謂る廣い、大きい家も、これを世界に比べては、殆んど、掌の上のものである。庭に手を入れ、室に裝飾を施して、立派々々と賞めるけれど、要するに、掌の上の話である。何程の事でもない。そのちいつぽけな住居に頓着し、執着し爲めに心を煩はして、窮屈に世を渡るのは、少々馬鹿げてゐる。

といふのが、度量が狹いのである。人間が小さいのである。人間が小さいから小さい家を家として、その家に我慢する、度量の廣い、大きい人間の、能く堪へ

得る所ではない。

大きい人間には、世界中が、我が家である。我が庵は、かたも定めず、ゆく雲の、立居さはらぬ、空とこそ思へ。」

我が庵は、青天井に、土むしろ、月日を明り、風を手箒。

といふもの、大人物の大度量である。これでなければ、樂に、のんびりとは暮されない。

世界中を家とする者は、我が家には頓着しない、家は、身を置く所、雨露を凌ぎ得れば足る。とばかり。決して。大きいことを望まない。美しいことを願はない。僧似雲の庵が小さかつたのは、その人間が大きかつたのである。俳人吏登の家が狹かつたのは、その度量が廣かつたのである。

□毎日、一時づゝ勉強し、積んで、十年に至れば、愚味の人も、化して、賢明の人となるを得べし。

スマイルス

九の二三　櫻井吏登の清貧生活

◇秋の色、糠味噌壺もなかりけり。「芭蕉」

櫻井吏登は、江戸の人、雪中庵嵐雲に就いて、俳諧を學び、師の歿後、その點印を承けて、雪中庵二世となつた。衆の勸めにより、一時、嵐雪と號したが、程なく、舊の吏登に改めた。

老後、深川北島町に卜居した頃は、その家、疊二枚を敷くのみで、書を積み、机を置くと、殆んど、膝を容れる席もなかつた。であるから、來客中、遲れて來た人は、入ることが出來ず。先の客の歸るを待ち、入り代つて、風話するの例であつた。

如何にも貧に、如何にも清し。其の風顏の幽玄なる、當時に、和する者なく實に、陽春白雪とや稱すべき。

と、俳家奇人談の著者は評してゐる。
それ程の俳人でありながら、常に、
『自分には、何がない。』といつて、數年の詠草を捨て、たゞ八章を撰び留めた。
梅咲いて、あたりに春はなかりけり。
大竹や、人はねむたき、五六月。
花すゝき、夜は、ほの〴〵と明ながら。
又た、自像自讃に、
置く露や、何になれとて、古茄子。
寶暦四年六月二十五日を以て、歸泉した。

× × ×

疊二枚の佗住居——これでも、身を安んじて、自然を樂しみ、風流に遊ぶことが出來る。
否、この心持ちでなければ、自然を樂しむことは出來ぬ。名聞を憂へて、家の構へを大きくしたり、物を貧つて、美衣、美食を奢つたりするのは、我意が熾んなのである。我意の熾んな者は、他人と親しむことの出來ない如く。自然と親しむことも出來ない。自然と親しむのは、自然の前に、無我になることである。斯くてこそ、自然を樂しみ、風流に遊ぶことも出來る。疊二枚に安んずる心、卽は、風流の心である、我意の熾んな者は、自然の友ではない。名利の心の深い人は、風流の門外漢である。
今の世には、俳諧成金もあると聞く、彼れ、果して、俳諧を知るか。

九の二三　富家の墻壞る

◇和光同塵。「日本俚諺」

宗に富人があつた、暴風雨で、その墻が壞れると、息子が、心配して、
『修繕さないと、盜人が入りますよ。』と注意した。隣りの主人も、心配して、
『修繕さないと、盜人が入りますよ。』と注意した。その晩、果して、盜人が入つ

て、大に、家財を浚つて行つた。富人は、
『お前は、先見の明がある。偉い奴ぢや。』と賞め、
『怪しいのは、隣りの主人だて。』といつて、暗に、これを疑つた。

× × ×

息子が、智者なら、隣家の主人も、智者である。一は、賞められ、他は、疑はれる。畢竟、

知るの難きに非ず。知るに處するは、則はち、難きなり。「韓非」

で、智惠も、用ひ方によつては、自ら禍ひする。相手を見なければならぬ。時と場合を考へなければならぬ。

否、それよりも、「和光同塵」。——

その鋭を挫き、その紛を解き、その光を和げ、その塵に同ず。「莊子」

愚を以て、智を守る方がよい。更に極端に、一切、智惠を用ひない方がよい。

九の二四　眞木和泉の節義訓

◇雨風に、見る影もなく、破るとも、古からかさの、骨は朽ちせじ。

「愚佛士」

「士の重んずる事は、節義なり。節義は、たとへていへば、人の體に骨あるが如し、骨なければ、首も、正しく上に在る事を得ず。手も物を取る事を得ず。足も立つ事を得ず。されば、人は、才能ありても、學問ありても、節義なければ、世に立つ事を得ず。節義あれば、不骨、不調法にても、士たるだけの事にはこと缺かぬなり。」(眞木和泉)

× × ×

輕業の師匠や越後獅子の親方は、弟子に酢を飲ませて、骨を軟かくするといふ死人の鯱子張つたのには、土砂をかけるの例もあるとか。酢よりも利き目がある、